源氏外傳

東文研

桐壺　第一　空蟬　夕顔　若紫　末摘花

紅葉賀　花宴　葵

守田文庫

德川文庫

横浜市立図書館

帝国図書館蔵書之印

帝国図書館蔵

りの婦人云いはんとかくの数と書きあつめられ
書の中ハ女うゝおもひ給ふ（さうもうたゝ文学なり）
ものハよみとさうゝ侍れいむりよう出をとゝかゝの物語
をのゝゝ侍ていさゝらう物はんよりあの事侍た
ゝ中ゆゝそうゝしき事とゝるゝゝきまゝ心さゝ侍た
源氏物ゝゝハ色好ゝのるのゝを作て出侍るのあも
とゝさゝゝ心かゝきゝ女の出をゝるのゝ事れハかゝきゝの
やさゝきゆゝゆゝん又ハ同一女ゝ侍れ人のかゝふゝゆゝ
よりのおるゝゝるゝゝ侍るゝ多ゝ侍るゝ

ゐんのふてをのつゝをろかる世の教しにあら
へきるかや作ん云源氏物語はたゞよハ好色のみと
かゝるとも実ハ好色のみあらさしやゝ源氏物語を
ぬきんでゝ人ま可きまゝ迄る人ハ作さゝのうゝ成
書ゝ意趣ハよろ州のみ世のまゝよるハ好ゝ上代の
英風おとゝて深ゝ感ゝ動ゝ成ゝ事をゝふゝ
ゝるゝあゝ可きさは人いゝてちゝ事ハゝる人
ゝなゝれハ世ゝ以ゝ世ゝ為ゝ人ゝ為ゝ善ゝ
多ゝれゝ行ゝて人いとふんれハゝの書久し

かゝる人ゝも多ゝ人ゝ作ハ作ゝ記ゝ名ハ出ゝ
世の注ゝ意ゝ為ゝ世ゝ為ゝ人ゝ為ゝ善ゝ
法をあゝ作ゝ記ゝ好色の多ゝ風ゝ有ゝて千年ゝ
いゝ以ゝ上篇の英風ハ古ゝ今ゝ絶ゝ強ゝ
ものなゝれゝとゝ物ゝ語ゝ一篇の作ゝ物語ゝ
ゝいゝ作ゝ者ゝ有ゝ人ゝ作ゝ者ゝ
かゝ作ゝ物語のゝ作ゝ物語ゝ浅ゝ人の和漢の書ゝ
ハ作ゝ記ゝ名ゝ世ゝ富ゝ言ゝ作ゝ彼ゝ先ゝ
作ゝ者ゝ人ゝ作ゝ者ゝ今ゝ人ゝ作ゝ者ゝ

れるとの事とあるにて出るるいあるとも実に
其沈跡あるにて此人心実を文あるるい司馬
遷の史記の筆法あるるにいる近代の人れとかくん
るる源氏君といふ物色人れ名成御ゆるたて作るもの
るるといひるに古今和漢の故事又い世のるまたも
とるあつるくれるせかるるるるるに紫式部の文あるれ
博学達れ人にて国史をかるつるとて下かきしをるる
を式部とるるるれ此物るるかるあるるるるいるされい
一条院に此物語を御覧ありて日本紀をとるよるるる

るるなれと作られるるとそれて此物語をみんまぬる色
源氏のるるとんとをれ作者れ奥書に人をつけて書
中の作るれ名をして是をるるるるるこれるるる人い
扶るるて菅丞るくるる史日本王れ長久るるこるい
礼楽文章をるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
別るれるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
別るれるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
天下れ掌るるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

かゝる王者業作り五常を定め給へる業はて
徳あさい人の敬ふ事人倫和して和らぎ
いへとも法きびしく強ふるもちゝ強ふると強へくし
ていまゝ礼楽文章をもつて人情のこの強
強ふ所を世わたりとかいて中ゝ人情上代の質
風に礼の正しくもてやうやう楽礼和して僧ある雅習
世ともに上箱ゝ雅楽と敬ていやかゝぬ人もち
ひし次ゝ書中人情といふる詳ある人情と考されい
五倫の和と考ふる事ゝ足る所ゝ国治次家

そのゝ治る世所を色情の流風をのこせるは善悪とする
人情ゝ逆さんゝ為ん国民ゝ子ゝこんゝ政刑ゝ手用
ゝ人を為んゝ政ゝ礼人情時変と知
ゝ成ゝ事ゝ人倫ゝ和ゝ者ゝ
人情とつゝ考ゝ其所ゝ
考ゝ欲ゝ礼用ゝ
きいゝ人ゝかゝ人ゝ
ゝ不安ゝ考ゝ礼ゝ
ゝ考ゝ

すむらせ人々の人は文をかくらこそまんのそふ而
をすくいひのくしを人の仏言葉次第よ俗よちくるを
ゆさ言とかくるあるく言葉といふをの出てむつ
くしくなりぬかくなりて世けい古人は日の風流に
やくくふ知くいよ〳〵俗るれやゆくきるれ汁出中よ
おのて文章は物あるとふるさ日のこくたるかくきあを
えくひてくるとつくくされ古人にくるとつくき
不富をひくくふ源氏物語るとるるくくとと
えくけあ俗ふ風化をなとして世り中に音楽は

道を委くくるるとり系行は遊ふ君子のるさるり故る
笑絃はあるひとるくさきふ上らるの風俗なくて九情る
るるくおくいるとるれふ人の仏ふ生物るれふ動るとふ
るる一楽ふ行るひのこ所くるるあく故る所きる
のこるるる形るよるる所ふるるつくく人くく上らくく風俗
をなくくるふくくあるる強ても楽は行るくとき人ふ
面白るるかるる仏ふれふ又るる俗くおるくるるきあく
俗くくるるるるるるさいるるるるるる古俗ても君子は
交りふ俗くて水のるくくとくて音楽ふ君るはたのも

仁はゆゑなれいかに仁はゆゑ人はそなはるものなれ出るむすこ一つのそなへみちのれ真まことに一人の男女
とるべき業をそなへひろまりて伝家のあはれとなる
人にもあるべしを近世とかくて上られ技能ある人
はゆゑなきとし音楽のるあるいつれも人はなる
なりそれ家とそなへやうやうつもる中まるべし
家それ業とあるべしそれ遊ぶ技をおちて役者の技
おるべしてまるれあるべきるべき家とる
我仁出まて知る小人の人はなるあるまる

孔仁の人あれは秘する大事とて我家のおしへ伝
ふ知る人稀なるべし知人もとるるべ孫に伝
ものれ弟子はあまれ人をしんあるれ
秘する大事とすることは知るべきに人をいひきせ
かさぶるべしなれ右をんるを伝人をえる人
すをるあるゆくをのこれるれるをすることなる
右の通秘事大事とそなへたるを家をそなれ
とは知るべし小人の我は我立の利術情にまるべき業
のたるは知行かとるべ今世とるべし知る

人ゐふ〳〵ミ所ゆゑ伝ふる所の其味ハ
面〳〵かくのごとくなるハかこ
〳〵かくさるゝ所なり世わたるハ流ゆ
かさおもうふ所ハ刈ミ風俗ハ山ハ世ハ家
くの秘する口伝と云事出面ハ所〳〵ハ
うくさるより大器と云て多くハ
ハ世おいて所ハ世おいて所ハ世ハ
すこし話をくミたの意味ハ面〳〵すれなを
ふおくるよ旦風と後〳〵俗と易ハ楽より

よりハ多〳〵ハ世ハ世おいて音楽の所ハ
人をゝ多て出をくハ山ハ山ハ風化の所をつくて
人自〳〵鞍馬をハれ山ハ所の改ハ所なり
まて上古の風ハ能ハ〳〵ハ〳〵ハ未代の
ハ〳〵ハ橋ハ〳〵ハ孔楽の変代ハ
おとゝ風俗の優ハ所ハ所ハ〳〵ハ
九重の遺風ハ俗ハ公家の風俗ハ絶ハ
ハを思て彼臭をハ〳〵釜をハハハ
世ハ所ハ自然と人ハ色をつゝ糸ふてあるね

世人よそをいとめ明君はまことなるべけれ
ども人の志あるさまをいはゞ仙術あるいはゝ上世王者
の道風をあふぎたるべんや是ハ順徳院ハ仙術をい
日本は至宝と記し給ふまゝ物ゝ玉ふ宝ゝ而
すべて礼楽の作ゝ遠をとる中人以下の人ハ主源義をハ
知るべ婦人云
とさゝるゝ人ゝ砌ゝ所ゝ作仙術
を皆さまゝよりあるべてうける所ゝ桐壺
巻の中ゝ更衣のうにまゝ みゝの霊柩ゝ色ゝ
をもろこしにはなりひさ出つゝと云ハ玄宗はかるゝと
吟ゝ作ゝ者ゝの人ゝ色ゝ色ゝ見ゝ色ゝ見ゝ
るゝ作ゝ作ゝ巻ゝ内ゝ仙ゝ作ゝ作ゝ
ゝ作ゝ玉ゝ玉ゝ作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ
宗ゝ玉ゝ玉ゝ仙ゝの人ゝ加ハ大平は天子といひ孝徳
は序ゝを作ゝ蓬萊の宮ゝ真ゝ人ゝ
人ゝ作ゝ楊貴妃ゝ色ゝ身ゝ世ゝ
出ゝ桐壺は帝ゝ御人ゝ
いゝを玉ゝ作ゝ作ゝ出ゝ玄宗

楊貴妃の力強く心さえ
霊花の高き香りを
ハ初威つよくして
人のいとなみてし
せさりし楊貴妃ハ
便宜先意希有とハ
ちかくハかりも
ま大くけさしみて
市ハしき事威の

ろもなく強くして
昼夜とすきあけく
天下のまわるを
礼出ずるを貴妃
文衣ハ上らく
出る事ハ行の
所女とハせん
らきものハ文衣
父ちてしろんハ

人を推て
ちなく人を推て
別なき有り叔父
国忠推をとて
宗城をみ楊貴妃
つて出死を相変れ
人と兄弟一家の者と
人なる彼れ賢女
ていて上らく
ハ世をすて
賢女の風ある人
母君ハて宮仕をも

此ハまつあはれなる御事也楊貴妃ハ玄宗の貴妃ハ字
及び其兄弟姉妹まで富貴を極て奢し事をつくし
此更衣とは各別なり志ちる事楊貴妃のなすところハ人倫
といふ故ハ此君の威勢ある人心とより徳ある人の上にはあしき
事あるといふとも[illegible]さし出る事ある人をはあらすとも
ことしとふくみなり
すりけ此君とは春宮とはいひや春宮とは[illegible]事はいふ是天此
時乾坤南北に位し震長男にて北東に立て春をつかさどる
後天の時乾坤西北西南の無用の地に退て震辰正東に位して天下此

春をつかさどれり雑[illegible]はちもやこれ花をこそうり今は春を
さしや古此花ともいふ此故に夏は春の事とも然は
春の事を収めるは春の事をも[illegible]春哉
つかさどるは天下を知るの事に此故に御位をつきなむへき
皇子を東宮とまうすに震は乾坤の長子にて北東に
ありこうりあり春は西をもつて[illegible]西東に出て
天下を知るの事なり
おほくいとやむことなくといひ
後は武士の実徳ありてその世をたもつとおもへの志をとる

さゝれんとて比丘尼女徳女容備りて やもとゝ
あるとゝふ有るべし
時おしの物〳〵行るゝふれゆへあるこのふり〳〵は
上らるゝ人は上られるとさるゝは笠用ゐるべし
手布作かゝすれよりきれゆへはおいるの形〳〵は
必定の一方ゆきゝ〳〵みえるちよくて琵琶
筆をかゝりて布作り行れ形ましみれとうすく人
ゑこめるくちいはゝ孫とも張をかゝりて下座をれも
日比のようきとゝふ人ゝ〳〵ちまゝてさんゆる人あるこ

坊ゆれよりゝたを
夫婦男女ハ子孫ハ撿れ為ゐるゝ子ゝ行て清ハ母の威徳
ゝ一人のゝ人ハ入ちふ〳〵ふるゝをもつて用ゐるゝ
おれうるべし大臣北嶋女帝ゝゝれ一のみこハ京文ゝるゝ
ゆ敬ふゝれとゝ行ゝゝは比丘尼服のみこと帝ハ
ゝ行べゝと女帝の敬ゆふ一のみこハゆゝゆるゝ
〳〵せハゆゝ一つゝにて源氏の君ハ帝ゝ一ゝ北嶋
子ゝ為ゝゝゝ世俗ゝれ婦子ゝハ大切ゝ君ハ北嶋ふゝ
為べいとけゐゝは他人ゝ人ゝ男の北あるゝゆゝ

光ようしゆきと申すやうにふそく帝のはらのさみな
ちうにはしりうひて記さるべきやうにうけ給はり
はべるに後情とふるの後にそ定まれるとゆゑ
なるべしとかやうに侍りし人は異類とて伝おとり
うる人は悪とそ伝へあるさるはなれはいかくさき
侍るしさ更衣腹のみこそゆつり給へるをつぶやを
世侍るに自ゝさゝつゝ給へしいのさゝ成なは帝崩御
の後は世はさはさあるべしとゝ人情は野めはあるをと
知へし耶代の天子は妻十二人侍る内は九人と定給へは
侍子多くうまれ人の子は多は母方に似るものなり其中母は
よさるに似又母方は兄弟のよさ人あるに似て多くは侍子達の
中に賢人生給へは兄弟に太子を立侍るはつみなん
あるは主長男に侍るは世をまもりて治はかりて徳はえひ
るるはは世に未まあるゆきはは兄弟に大よりはの
の理も極るるとそ思はれ侍るは不思議なるとそ
行へはかくて孔道の説とあるはなれ大方は悪とを
おとるおとるといへとも
うちはしらは後まかこれ

かよふ程は不浄とおもしきて衣服をも汚しさまざまも
語にかへさぬ程なしとさしこえなくすべくなりはあさ
るハ彼の男彼れ女によつてまさハ志らぬさまる嫉妬の凡
情ふかく火宅さんかして心ぐるしかく宮勤て行うやぶ犯
邪思ひ出来るその皆大臣公卿の息女なれてかりか弁さ
る我ハ志りのふやすきるなれれ孫もしふくしとそふ君の
身ますまするあれハ穢嬌あしく行きるあさハきえん
よききのなれハそのまされ心をかけて下ざれおのと見れ
志らる都に少し今大身の人ハ民をとなし兎まいふ

下知ハ多くれまた人の利を欲するやうしけてそれはよそ
つ小人にさまりの謝義とまるなし上すハ志りぬるとき
とびふかし土のぬむ和かして大ふそのなし帝は世勢侍従の
情つとめをとこりのふれハ清んのいと虎行ふましれハ
まりのかりのまこと乱義れすらなしとも侍きとしれなさ
まし清志るよふかし又ハ詩をなしとし史衣の
眼に行し　あらは人の説うしあるへしまた牽牛織女の
秋の一夜ハそろなきやうなれ此世と語てつきぬちきりそ
あまりしかれ何すしきれつきて食散合分とハふ

まのあたりにて久しくみまもり
奉りてかくいふ人ありけり
給へるに出家あり歟あり更衣の命
をしんをつくしたりし帝は世の多の態のあるのみ忘しかて
子ちん更衣の多といふ人おもしろくなん
なきハ事ふれ給へるにはかくなりぬるなるハ
れ子ん方ハの所ハほんしつ成ハかりなるにて
やすめれ母をやまれをとさるハかいなきる人ハ
の子とをもしたるめさしかるに成ちさるを思して子ハ
るをとゝさるこの子ハ是ハ多とハ思ハとゝる
場ハあつき方人の心ん帝ハ山ん方ハまたはまの人
れひらをとりこうしかの更衣ハ子みのふんハ
心ちなるねのうとかきるし
上られ移ハ糸行よりハるし　仇方指あるる上る
ゝ仇のあるき方乗ハさのを切るしてハ手ゐきる
仇あるしゆくうよりあやうるあるふこうれうつ
人うれ仇ある
ゝるふゝこゝ出ることめて

思ひてうもれしきるふしをきくと妨げの
のこるぬれぎぬとなりあるふかくらのうちにかくれあるを
あるいひ出るに引きくるふて優るうちにうつひのひの
上らるしきと人うちとふるしといひるるし
月のおそろしきに扶ふくるまてあそひとそをふるある
常ハをとをるを系行の吉はやるれやるあの一巳扶月月
一人真いあるるなれも情人を無あれ公主上の情人と
ないやるしあるけ兵ふを意るる扶ひとをを一一学
ちくを乗上られるる時の風情るかをるし

なるをうハ治あをるを兵毒ふくるを乳父をれ公男
むをはらるをとをいるを人ハかるふあるを一をるく
ひをまつること
君臣天下を行るるあるてんをうを若事を去四
近臣の政のまれるを行るを体はまをしをを君臣
を出事行る法臣ハ美ををまるれ行るハふを乃ふを
なを人心君れ仰を和をんを志ゆを出仕をるを
なををいるをハ大政をれ人心を乱をを出仕行しを
大政をを古を大臣又中納言
参議兵カ納言外記史をを士人をむをハ天下を治るをとを

治せし後三皇五帝の世代の賢王まで新まつりごと出
ずして万民のうれへのそこなひ自ずから出て延年
天壽のいのちとなり新まつりごと方へさかりて
今はくちるのみさふらひのひ
ちとは梅福とゝなれはなを内とふ義にて人は一身の主
宰にて天子は天下九州の一身のうへに出るゆへ天下九
州の人民天子より出たれば又標中とふ事は可正と
梅ふくる義にて王位は人位にて西位にて位御のかゝりなる者
形儀の是なる者なれば人さる法に得尼心是形是位

ある位に名籍の多蕃客と同じく吉蕃客のつゞきと
とゝなくゝ今は大神宮は八百万神を文中に祭るまれ世
いまゝゝ言葉人ゝ相人なれは是御の者なる位に古風にて
宇多の帝の御代にてゝのふ なるへし
ひろ人
人の形とゝゝ吉凶と云る者に吉人に六吉の相ありて
悪人には凶の相あり家に所つるに又形に生付あり
是は是相の吉悪に
相壺の更衣の所にてゝ

人情とふものいまゝ程はかりなれ侍文は世間のかなしき
ことに是程とおもひ〳〵世すて人を行もまゝ〳〵人をも
かの妻の是程とおもひ〳〵妻をもとはいひ〳〵いふものなり
なをふかくあはれをもてる人なれて清はらはれむかしをも
忘れたる人のようなると拳の妻のあれてある人情なれ
ものとおもふるものゝ何ぞ桐壺の更衣とを思ひていろ
〳〵のみ〳〵なれなりて清はうゝ源氏の世間
一人ゆゆ〳〵人〳〵いけ〳〵いとうとくてかゝのゝ
まなゝ〳〵

あるゝ〳〵とおもひてらゝ〳〵〳〵
なをゝ〳〵とおもふ源氏のちうをうをとをれとおもひて
いくうゝゝとあるゝうゝ是帝は紀をうをて更にはいまゝ
つゝ〳〵ある清のひゝゝ出来〳〵男女は情は律義のゆゝ
とをはるゝ山ゝ山ゝ山ゝ人れを作ゝ〳〵滝の源とをさの
〳〵川ゝ流をつくゝゝ〳〵れるゝ〳〵〳〵ゝ人の恨
をれとをゝてあのゝ所ゝをゝゝゝ邪思をゝ
をゝて〳〵ゝ
ゝ人は情は作ゝ川ゝ世

上古は大学寮ありて諸国に国学ありし也 嵯峨天皇の時藤氏院と云学校あり
皇子達の師となりしかの学問を伝へ給ひ 仁徳天皇の時百済国より儒を召よせて
ゆゑなり 聖武天皇の皇子と成給ひ 仁徳天皇の時百済国より儒を召よせて
門徒とする所の学問人々に学校を建て
文武の業を教へ給ひ 人情を尊ぶ
有る徳を尊ぶ 文武を博く
志を以て仲哀天皇 嵯峨天皇自大和国に西殿を
御建て給ひ 未だ世を治め給ふ 政教おこり

一六十三 元彼の皇子達に学校を建て給ひ
とひとしく人の居を定めて世好色の心は
て業を身の為にやとふ人情は変ずる如
見し王威の下に天下を失ひ 知る
聞く人の人世の中に立ぬを
世々の
業の上の宮女稚児にかくれ
くと成て 男の如き
世々の上に 嬢如なる 風俗の業上

の母宮の人々上らせ給へる出家とやうにおとし
て学校などのこと給て源氏のこれにすまし給
まへ所々にて母君所の母屋にたちて
さぶらひあり給へる王侯のおとゝ
やうにうら母屋とおぼしたる所にて
人々面白き後ろ姿ども吹寄せ
給へるつゝ家居もいとめでたし夫の人はて
つゝをんとて給へ出給へ養上のゝ妻の方へ
て給の礼るき中ハうゝ風俗ちゝ西にて

さしあ行かのゝ花盛りにて
らんの人のかのゝ人とつけるもなかめ
そのゝ木ゝ山のゝ花ひあり
木ハさしたるよりは古木ハよき迹山も
ゆうなるいんゆるゝ後世ゝ社の大木と伐
仕と結梅小作ゝるとゝ人のゝみふ
さゝ古人ハ仙ゝ古木とハのゝ多ゝ

第木

かゝるゝとゝさゝつゝ

かくまことのごとく人はこれをつとめかなしみ
遁逃はあれどもかくのごとくなるべきことにあらず
吾聞く微のおもむくへきまことの人の心は形色声
臭ともにあるべきものなり世はよろこ
んでかくしてこれを彼人はいかんせん
このかくさとんをもて世人のあまねくもとむる者は
これ吾人の所なり吾人の知と行は天の先と知と
凡人はこれを外人のさとりとおもてこれを吾人
の独明とおもうなり

ものつくりかとすりしをもて
微妙なりとしかるに早れ死をもて微れたりといて人は
友とするものなり漢の光武帝の嚴子陵を友とせんと
す子陵は光武のそこを位とせんとす光武は子陵の唐人を
而をもてこれを人の知るなりと。はたしてこれを
嗤るかなるものはみりるなり
人とはなにかいうべきものおろう
主為もしこれあるべしこれをもて
大人主上のつくるべきなり人は位は万乗の上にて其行ふ

是ハ世間とゝ[illegible]るひ手切ゝ[illegible]ゝ手切と云ふ大事
抜ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]人情と[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
さハいゝと[illegible]ゝ[illegible]
男ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

知ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]世ゝの大神といゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]人ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
子の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
是ハ婦人ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

心ハこゝろひとつにて浮世ハ富貴をまぬかれてすむべけ
れバ昔かしこき人のいひおかれし文の道をも学びて京行
此根ひとつにて何をかなすべき事を行ふ富貴
の財よりも一きハ中さかりて心をつくしたるかひ有し昭石の
人々上の品の人にならひ給ひけるとこそしるさりのと
せんにハなかなか位をまちかねてしるしとおもふ
そのころ人よりハこれにてあやまりてかくれなき
めでたき人ハ世をすてたれバ多くさへかきとめ
まへにいふよろしくなるを

此源氏のものがたりも富貴の中よりのこれる人多かりしにぞ
さきのおちくぼのにハよしある右大臣の女にて弘徽殿
女御の中に有る人あり大納言の女にて桐壺の更衣の中になき
もろこし上らうしき人を下の頭中将の例をあげて道をかたる
なり
これぞまことのめでたからんにハ
富貴の家の子ハいと多くハ伝へ申し侍る
貧賤の文のことごとくよりて道をすゝむる人あれバ
わらハのことハ知りたるまでもなし中将

生みし上我子乃へさしも心つきて無慈悲文盲にて根性弱し
をしへらるゝはよろしく生まれつき猶しかも親兄の風俗あし
く其人はなをさらとゝのほりかたかるへし
大かたみな世につけくろふはいとかたきは
となさいふる細なるに何事もよくふして見ゆる時は細なき
人は立いりて見る時はさまゝ多きものなりて一家皆皆
内とものゝ人をえらふ我られもしあちらの人はあやまちき之
世の中よりふかく何事につけても心やすく叶ひかたきはなきわ
あり 総ふて心ふかくなるやうにあらんやうに常に悪き家風の

何事は悪癖あるか親兄弟の人々あしきか千万の事具か
人けなき生れつきか積悪ありか忠孝多き災く利の
ことく大事か底多きあるかよき縁組させて定るかよき
ありなかそのことそのあまたとあくきるやうなるのえ心にてあまり
えらひすれはかゑりてあしきを定るに多し 総ふも
見えらひする者は深く家の是をさして教まる者は
そもしは半年の内よりよく見えらひ人をえらふ者は
大かたはとかくそとなふそのまゝ文男子の答をすれとかくは
一向えらひなく何事女にもみかくなり 女なれみんなる

万人にすくれて世の才のたけなるも頼ゑなき君子の丈なる
おこなひを一生むなしくすくるもあるはけり男女夫婦のうへ
人力の及ひかたき所あり命あることしるへし
激れることあるなるをとらいてなくはかくへし
いかにも才有りしとみえし君子も人には其の徳あるへし
天命にかなふ志あらはおのつからは天下のひろき中には賢者も
出来るものなりよりて徳不孤必有隣の理も上下徳あるへし
学校の政なくてこゝに才徳の人をえらひ求ていにしへの時になられ
むかしは才あるものあつめて才をえらひてあけて
用ゐらるゝ事あれはなるへき同し
上を下よりあけられ下は上よりまねきて
国天下此政は知後まてつゆその道は千年才徳ある
なる人をえらふへきのよしなきなれ人君たる人は自才智有
れはとておのれかしこくしてさきとせん寛裕広中にしていつくし
天地の学のこゝろなる時は尊く識し此志にて天質を蓄て士を
えらへるその心穏にしてなるをとえらひて時不此中庸に叶
ひとえ其国のみは君の徳ある故に此なくてはかなはぬことは
事は千年君より出へきなり才智を以て士をえらふる事

以て兵六上の俗なるつきそふめる所六たとへ人の子を毎月のことに
たとへ子を毎月のことに人後と云へ一ことに高しかるよ
学校の政孔孟の教を以せはたあるせるへ
せそこ家れそのいろ一とそ人をとそひめそ
たそそいろそ大すそ家るんかへおなる
一家れいろ一人のそひまそれ家れ大すんそれ門の
ふ家家人の妻元おそ家ハ妻の人元家不家かそのそ孫の
登裏ル妻の仁不仁ましる妻一男子妻のかそ人生
母似そのんまふ似そいそ家へ似るまふ

一大すのるおん高知るるゆれ丹毎四それ
壮弱のいそする得いそ絶ゆ若ハそめふそ
すて人の子を砂るめん大き妻をよする妻行用
れ拾ひを好すれ妻をつそめ妻ハ中を拾ひを好すん
そうを妻ハ母れ人術能ゆそらふるるれ人妻れ
子世妻まそを強く家門家ハ足れ事用を役も
そのふらそそハそ方ゆたそそ一めそるたそ
それハ家生ハ天下れ無の源又一句を妻るのそかそ
めそし唐人の書をそハそれ者一士以上の婦人の文れ

[illegible]

せ〳〵一段い張二段い地に文氏れたるれい西〳〵さるよ

あそふするふてハかるれ

かるすし我をふようるいねそんそめつる紙ふとすて

ふ〳〵そのようる人ハあるめるふふ

必ずんよかるいねるいるれふとくんてとふ結ぶ〳〵とふ負んに

存ようる人こ世ふふ若い我と嫁とさふ考て年ふふ二のれ

又母嫁のふふひそひ嫁ふふのるを深ふ思ふと我ん

あいすとて離ふすふ二世ふ人れ加原離ふるふるれふ使

ふるるふ不仁不義の西徳ふるふをふ〳〵みふ思ふそふふ〳〵

怨人ふて家を人ふふめ書と祈ふ中ふ若ひふふるかんと

之とふふぬい大ふ世の中れ存ふ戒い書の又ふ一つれ者とふるひ

戒い家金とそふ人ふとけふて一ふ〳〵とふ思ふふるふ中ふ

めをそふふとふ使ふ若ひふふとふて一ふ思ふ若ふ一又氏方

のいひふふ孫ふ邪ふふんふふ中ふいるふれふ男世ふふる

何れ君臣父妻夫ふ人ふいひふ〳〵ふ〳〵ふ一ふ若い世の

中ハかふ〳〵のふふふめふふふ君ふハあとふて和とふて

世人ふふふめ初ふふ人ふとふ人ふとふ思ふ人れ一ふ戒い方ふ

かくることを知らんとて或いは或いは或いは或いは人はいと
さらにとどまらんとて或る人ありさまとそうもうぬとすつる物語
不信不信にていまの世の人とるるかくるるとさしらせて
やうやうとえうまてさる付人時一安一
そのやめやうをつるる人
立世徳世容の侍り婦人はをしき源氏の時分三部
をそうしをいもようさまうつるまいらんと夫婦とる物
友とすもいん人たちのさいかをうるかくるるかくるるたのしけ
ふるさいるもの人いるるに人年月をへてとさるるめかくるい

よりはと貞心ある人の志賀にのぞむる人形ありてよんまそうまする
あり年月をへてをくるるめくるる心自然と涙つきる
思あるめくるるさいるいろいろとみをいるるをたつさそうる
人心つのいろをいけをて実る時をいるを右に以るを酒を見
そのるれとこをもりて引くしる弱く川をいるをいるよ
やうやうぬるもいあをえをつるをいるせぬ人必あるをいる出
そのるり
いけりの拾ようんをくるるいるとはるひをいをいるを
とるれるかをいけんをあるるるをそをいへ

拾遺抄に文章博士菅原ノ道真ノ
なる人ハ日用のよろこと入て風流なるこゝろハ人とゝもにあぬ者
多し又風流なるこゝろハ家貧窮なのゆゑおろそかなり
世俗あれハ世俗にしたがひ世俗ハ夫の望ることゝ
なるべしたゞなる人ハ一のこゝろハ人の見人の
優なるこゝろ人ハ人ゆゑなるハ家を中に世俗なる
世俗にしたがハ世のゆゑなるハ貧しく世俗なる
貧なるハ貧窮なるハ貧窮なるハ貧しく世俗なる
実あるハ世俗のゆゑなるハ貧しく世俗なる

世俗なる人を用ゐる世俗なる人のかゝらしむ
なるこゝろハ人ハ世俗なる実世俗なる人とえらぶ
人の下につゝしむこゝろハ人ハ世俗なる時ハ世俗
世俗なる人ハ世俗なる人ハ実にひろく世俗ハ
なる世俗なる人ハ実の世俗なるこゝろハ世俗
世俗なるこゝろハ世俗なる人ハ世俗なる
ふるこゝろなる世俗なるこゝろハ世俗なる
仏ハ世の世俗なるこゝろハ世俗なる釋迦ハ遠慶ハ流ハ死
て世俗なる世俗なる世俗なる仏ハ人ハ仏性ハ世俗なる

世よりいでて世をいとふ人とて仏法をたふとぶと仏ほとけ
とふ法の師たちもこれを仏とふのゆゑにいとき
なりとてこれをすてゝ仏像のやうにあるを仏と渇と
いへる仏法を梅処とこれをあるを五偏とやめ孔子神
仏を成仏とふ人出家してゝ人をすてゝ世をいかゝして
あまたの梅処をこしらへたり
仏はゝふかけれども人をいとはしくいとはるゝ
ものはゝ人のゆゑにぬけうめくさる
夫の人のゝふかきをもふかくしらんとぬきあふてす
さはさるに夫心ふかくゆゑにぬけうとしるとも
さるなりにもあらてゝ人をとゝのはるゝもあるゝ
断絶をさとりとこの人間世のるに夫書のこゝろをあ
しらへてゝ人をさるゝ何ゝ梅処をこしらへて言ふ
して世のゝをとゝ邪きをもとゝ人をれ法をゝるゝ
かゝ我とゝいてゝ人をれ世をゝるゝ孔子
えをもをさをとゝ人をれ世をゝるゝ
ゝとふかをもをさをつけて行をもをもをゝ
えをもをゝ悪をゝ人のゝをゝ

みつからすかす気ろハ皆あ火のなふろあく和平を以てよろし
もろしかる所ハ志をしみとあつて又の心ハおさまる趣
行ハ可然とゆつて君子ハよしみすゆるめれと云て行と学して知て
然の情を志る也 世俗ハ凡人火大業のよしみ了洲凡しむるまゝ
て夫婦ハ和睦し朋友ハ志をしむ五理を志て行へくしむる
そのハみくさんをさるは行之 此のかきすりてしむるそのハ
人の迷惑すかやうにふくしみをんあまりて何たさうやうな
身にハ恥辱あそれむへし 行ことえに天下をえたなむ
人ハひとしかるへきもの

すくなからぬ山のうへに木ふかく世をすゝめてたのみあつけち
うきやすき此肉とハそのたのしみひとさしてあらとをなん上すとハと
いはれひことよろしものハとよきぬ雨露ハ気ろ
すくなからぬハ不徳之つもりぬ山之たけかるぬ山のたかきを
それしいはほを以てへら山ハ出すしたけかるぬ山此すくふにハ
めおとろかさぬとハつくるあるぬやうなるハかきりなし山のかさ
なりいくへハたのみて源山やきてふるふ又雨ハ雲霧そのく
ところさ土とれさきなるへし山ゆく水流さときハ天下万民
命の源也山の水にして 節ハさるハ仁者此守仰ゆく水流て

そこなひたるはかりなるは紀州の人性の平穏なるひ
めもの人なり山水をたのしめり絵をかきてそのとき面白
しとて扇の中をえらびて花鳥をかきてよし絵をかき
てえんるーきものは花をかきたるもの久しくぬるものといふ女なる
かきたるし唐の世の絵は西洋のやうなる不正なる者の
日本の女の姿は中古のうつくしき今の女の立ち絵をかきたるは唐の
世の絵ふは和とかきたる女徳女容をかきたる唐人男の姿唐人の
姿なるはーー日本の男は衣冠烏帽子狩衣垂衣太刀なるの
絵まれはよし今の清盛衣の姿絵をかきたる芭蕉者

絵は日本のむかしはよしー近代の武士絵はよろしく武士のなり
ろくなるゆへなり
いとはいとはひるけきてそなるあるいはかふれふく
右ていぬるものの人なりてうつくしうめれはいと書をあれとも
やう時うきもうるとうとんと一人のあ実をとうとうとうとう
不仕女とふあ、内のうのみあて更ひとうとたのみとするあら
見は行とうくまみうとうんうるーさきはたひつをとうる
不安ーうとうとうとうとあるはよ不仕るんはて
へーたるあくくーすきるのめるかくるのくうて人を我

そこらハそんとのことひ女のせんりくふき情ととへさるなり
無してとよひのお殿なく源氏の女のなるハまさはいうれ
まろき人くよんをつくんとおしハむり　お殿はとうおしるう
しそいふべきるを此女妻のことなるハいうき移りハあり給ひて
これにひる色とことえ思まして若武部が源氏とのみなる人
此姫のくへをふるる紫の上へいうれ志れいひて人の心行ふれなり
さるするをハせんなきるを見てまし行まつさて妻のことと人
前をいふハそくるしきゆくんと世間にれ人ある人ハいふまく
まろき人の心はハつきしめと実徳ある女ハ好のまゝとなる
へき那といさんとなしハ我妻の事なれと何とそまそのす
そしハむつれるといひなしてハ何くべきるを紫上れの名に此
上むろつくのうすをかなしきひての絵るハさはまえしなれとも
女妻のあしき西なるうすのひ出るハ紫上ハ似合さるる人ハ
おとされてなと涙となしいまへきるをいは人の人ハ妻ま大溜に
つきて空むすとひき雑去之へきふれ小宮の御とひ我身の経未心得て
出しくうと云明石の大臣ありて若経すれ又同し源氏のむ之
紫上れは浩ふハ上らうしき人なれとかゝるの位まさ物いふ
源氏ハつねに人の評のしまい天然の夏仁厚の生つきれ

有るべくこれなくてのみならずまた世に行はれざる道理
三史六経のみならずまかり成
三史は史記漢書後漢書五経は易書詩春秋礼三変と
申すべくこれ有り候の学問なれば
博学をもとめずして
有るべきことなり其外は学者たるべき道理
女の有るべきなり男さへ有るべきこと
世上の信ぜざる人男の妻と女の女とこれ有り
人必賢人愚人有り女とても賢人愚の

文王の后妃は有名女にておはしまし
あり一人の明有る所かくのごとくなれば女にても
の用捨男も女も人のごとくおはしますことの為に出来る男女とも
とかくかるべきこと
あるとよろず詩歌とも理をとりて行ふ男は婦人は
ひやうの吉凶あるべきなり
こよひもとこの人はやてあるべきなり
あるべきことと申候て戒めてまさるべきなれば
いかるべきよう人の志なるべきなれば孝を志とするべきなり

〻て武蔵〻国ふ〻さ郡に生れたる人と考ふ理〻
いと面白かりんことひとつのかしこへくるん
三のふしいとかてるもの男さん又人にもあけよ我知らるゝんの新
あることゝかを人さんこちらひろたるハけく古の人も言のもて
うしハ知ることのうさきあるハ行ふことのうさきに言ひの
及ばさるハこつしきるあるもしたかもいとしてけくき
人〻あるハ人にいとせて我に行ことゝひやむことなれハ
志ふかてくるいけるき るとこう我もとうんをくゆつて
さきこつんハ庵に庵明に昨もれに言理〻あるに庵明にして
言理〻あるハ人の事んにより生理とこうるもの婦
人に申もてもこつ〻よ新ふと法とまんとふ理ちて
いさこうにあるハ上らしねこちにんより大るもことハ考す
ふて人にこせいすしてかるハさるるに行ふ〻ふこつ
いまてやもるとこうして人をのいるこことに後の男
これるに理るれにその人たるんこあれに人をのつこを
ひとこうこの男女に法あるに人に言すこう一天地に言して
罪に行れて男ねとに法の明
かの人〻のまてこうあるまんに人にハるまれぬ人ハ理

ねん〳〵いきのうちにさきはあらそふ海のとやまとことのは
養上丸新母りめたるもてなさうさを上らるゝ所たとやうに思ふつき
たるおすくるさるゝ〳〵さるれ人多とまて上らるれこれハ
やうなるねん〳〵るとおのゝるさんあ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
るるれハ和書としてうちたのまんまよ人こ新色黒ゆ形容
うちたとやうそんの点にうハ所女るれハ左右の人ハ世をあとし
ハ徒あれハ病けうそるうんるとおむへうん
そそるれてうう〳〵〳〵行れ世のたとひまむつれけて
徒母徒子のうえすて徒まとおもせとハ大切のせとと文ん心なく他人

ハいさえんそ多ハ左右よ世うあるへそとうそてみむ人出まる
いとうるハ家子丸中よくそ思の存ハあるまてはゆまハ
他人なれて新ハ思せれす我と徒の母とたのむるれハ
むハ思うとと思せん大切せんとハ思て行んるさうとと思せと
思ハ出んてまハ思せれすとあるへさふとんいて
うるうそのと新人なれハそのあ中をふるへて人かうれ若母のさまそのれ
うるるるハ思のそりハ行へうれ徒行字うつせみのれ
多上ようさ中ハ礼式の徒年そうるれハ思のかうれ行ハの
大多ある人ハ我子ると出まハ思ようるまをひうとと出年

うたがひあらんれい知のうち新の為にて上らんを為るをう
いんれいなるべし又こゝ世のなをひとへとなるべしこゝ為をいん
為をうつをみるべく紙伊る れいなるべし第上品為あるべ
こゝをとなるべし
めてこゝをもれ品為るべこゝをとやひて
万為るべきこゝをいんこゝ為るべるべしれ我為為為
こゝをいんこゝをとこゝ為別為為乃ん我をこゝをいんこゝ為為我と知て
さるべし上品の人こゝ吾恵見世の利実損益をとるべ〳〵て
仏道をもこゝをもこゝをもあるれいこゝをいんこゝをこゝ為

我為れいつもこゝ中品の人こゝ中品の上更我人の大切為る恵為
為て決定為べ〳〵〳〵空悟ハ決定の為ハこゝ女をひも寿持
為り天性智恵の実あこゝ為るべこゝ利実をも見ま
時欲のひ〳〵こゝをもこゝ下品の凡夫こゝ

空悟

やてつもるべてやこゝ為るべ〳〵〳〵〳〵為るべ〳〵〳〵為
まひのこゝさんひこゝていこゝこゝをこゝ為るべこゝをこゝ為
ゆふれこゝ〳〵為るべこゝ為るべこゝ為るべこゝ為るべこゝ為
こゝをみの人つをこゝ為てやこゝるのまつれるべこゝ為れ

あしきなんハうつをみれバわれてあし又ハあしくなるべし
忘れハとて心よくき勝をとらせてしんよ信あんハ迷惑なり
また碁につれあしきさまんと思ともつき時ハ発せるハ民の時之礼義
そむするハ先王の法ともその心なきたがふことなりあれべちからハ男女の情を
発するところ也非れ犬あて思ひをとし一つもなきことハ礼義よりも
するん也法勝なりし
いふくもられくしハおもむきにせりておもひ之をと心みゆしん
好色とんとしてそのるをやみんと思ひ之すれ実へ入れ所きたと
心とする者くる時としして好色の無念おこるハ礼時のあらし思之絶し

非よ所さまよろ心あれハその無念ハ智慧をしかさしおこる時ハ
やむまて他のよすかとうるへし心をみするとするすある者ハ邪路に
おちいるさるそのく
ひるよりあし此時よの気としせあて碁くしせずる
こふ碁のあるをいひならハ碁あらハ精と為るそのあれハ男士に足する
るくさむしの所と思ふ者き数之ところとも新路の獲とを精銳とし
よしやうへし名学とるすし六経に於ふ人の為にハ好事風流
あきものハ碁に精を入て他の何しきることをするハせあえてのるく
そのみに於人の行のなし あるへし 三百六十目ハ一年の数にかたどる

石の面白ハ陰陽の交よかてと詩の人ハ天理せんと云ましく
詩より石のいきおひと和のこヽろあり天理と云て法とする人の
みふハ無用のこと
かはるとしさしむかひたる人よことさとくあまりしりて有しかり
うつせみの用意ふかき歌也このうつよ得く出るハ容解の上なり
されハ関雎の詩ハ后妃の徳と称して宗祁宗流とよて宗祁宗流ハ幽深の心
かくちと付る家の中まても志ん慕ふとハ人をとヽれぬとさおかし
三男意失ハ専指なり
こちそ糸よつなるくとそく申と

ふとよてる所也一かとあるよき生みの人なれとも世しよつなるか氣
氣なし世よ大りさよ絶せれ和の人ハおかしくれ用意よるる又人まれ
なれハまさ生れみれハ何き随よなりて是とあさ世て何しく人多
そのなり
いよゐゆるくれ何らしるましく面すらし志くを達とかう
新境の歌ハいよゐゆるさを紀かそ人つへりしとえ女のその教かをゐへる
いそくなるへし上らくしろぬき随なれハ古き面のすましくゐうとん
とくなみるゐうとらハよれとも上らくのゐあて和うさハぬるみの
及へたる之下らくの人あて和るハたうよい畢きのことなり

いひられいとろさまよりかくちとにいへるをもてつきてみすき
わろ人までは心あんしとめつくへきを降しくり
人は用意心さるへしひとつしとはすき所なくはしきあるかよし
心さ海月意の徒ならをし行せてすしみあるなと
ありしなかれ我身なしはとところ入すねなし禍と
うつせみの心中姑ぐちう行り女の線とふかる有せる神より
天命をあらは人力の及ぬ所なりよさ生れ付まで心さ海の人行の心
なしぬ我人の所ゆきて行くるものと気あるなき行きはれ付より
らぬ心さ海の人までかくてし人の女といへる人きると示人の心の外まさ
所にして有付学ななる天命と安してあらきを忍ぶるは貞女
のみちなり

夕顔

いはこうさしてとおのれあせは玉のくて玄に同しきなり
世中はいつこうさしてわが身なんぞとするをそ宿とさとむる
陋巷なるなんと思ひて参なる人の目には玉なる宿とのこ好てよる
ねを住居といへるところを達る者なる人はむの屋は好しまれ七年
秋雨をすくすて居しるすと知し貧る詩人は草庵のなつかるる
楽をそしおてさしなる眠つきては悲しきる盛なる君は必ねたふ

死の所にて宿天より奈落に入る人は衰衰といふて死する者は十人
のあるにて仏のおしへまことの人なるものは少しなるとすれば
死せんにおそれまことに入る人にてあるべきなるべし後世
ものいとまこと入れば極楽へ下とおもうてそうろうべきなり
上とおもうて迷へるは愚癡の業なり 往昔三蓮酒湯武放代一朝暮
に入る者は富貴の業なり あふ度の境界くらのもの
天下をたもてるとも迷へるこころ
くれしるの上なるべきもの
九品上生也阿弥陀は寿命無量寿仏にて居給へる城の仏とおぼし

彼死に彼へ只者仏の者昂仏昂仏の行法なりまことの
因は生死ありさとりなれば生死なり此世界の仏の位と
西方寿仏と名付くり文殊普賢観音勢至ふ仏
は位と称迦とふ人の名付くるなり九品の浄土極楽世界とふ
仏のまことのみ陸地の仏の位よりて遥遠の
楽に浅深あるべと九品にてそうろう遥仏の所に行くに
ふべきなり 凡人の好きなふべきなり 往生
なきなりとおもひてそうろう往生なかるべきなる 杉風のもとまもれ
仏はそうろうれば十万億土の九品蓮の仏は安

娑婆世界即寂光の浄土なり唯心の浄土と云う意
うまさるべき佛と行ひけりと云和州なりしひの行けると
いふこの所にて佛とあらはされ死して仏となると云理
なるべし死とは死さきと生と云うて此世のうち
何なる所にて寂とうまるる所いそれぬさこの心こそ極楽世界な
いふべし又佛と云ふは有なる
かのるべしまたおりてまうとあるべし面授の宗旨の
時ふうしあるべしあるべ
大人の事は知るべと入さるべし人は悪のみまうれば対文
人の上なる人は善人をえらびてちうて〳〵なるべし和うあるべ
を学されいけるひふうまるべし人はまうべ人はまうべ
のうるる浄世の中のあるべきあるべうるべ改のんまうべ
るうて家人の事れいるべいまうべ人をうまうべ人
こいかうまうべの如何べ大なるべいふべ狂言なるべふるべたふべ
まうべ主人の下の時にてあるべかうべまるべといひてんとつけ
うまうべんを出されふべ主人いまうべ人なるべうまうべ下の所
まるべいうべをいひてまうべんとつまうべ主人は主人なるべ知るべい
主人拝して下とまるべ家の改まるべ家をまうべ家の改まるべ

あるべき人時世のうれへ民の艱苦とよろこぶ礼義の外の富貴
俗人
侈樂はあるべき悪人李神の行ふ淮知解事陰徳おそれ辛苦
とあるの歌〜諸事ものの声〜めさめてあつかいとも
しやとてあるひまもなくたのもしかるべき年のかくしも
世間をうらやみとつてあるべきふかき恵庶人はやとて踏
いとあるまじきものと貴賤をわかつべきものとみを
暁の弱のうとんじて記さとくるのふとましいかるべきれい
みの形さえうちふていとさもしるいふとやのいつさとるべて行
事あるべきひ業作あるたのしきとかの文詞のみのまるべ

年とうとうよろこぶべきものと思ひ世間高貴せんと打ひ
まるものいつて事とりてくるまんとんあるべいさひ科代
とはいとるみの思かくれ貧るべのまり今は用まるべ
子人万人の辛苦とあつてそ人〜まつすべきの辛苦とう
出る衣食全足あるべとおもつて学問の名をよのく用て世のとえ
民のためふるべきまさるべ思るべ伝たる人の仕合
いかるべ孫ひとりひおちふまるべ天罰あるべとおもつて
昔民間者よりう仮りよ出て家元の家柄の結構あるべとんて
世法構あるべ子万人の辛苦と家とのいつまるべるべ世人話と

いて平氏の世さかりなる時分人のかゝむかゝれたるおもちゐのあさけ
なるをもいとまきるまゝに以ての外人臨の陽明をはなれて
八月まもの山と示しかゝ十一月一陽来復し十二月より二陽もて来歳
六月迦の法盛と今年ゆく戒の法は世八幡の時分の陽とゆう
こん民の辛苦といとまきるけふこの孫の喜みゝて公家いとゝの礼儀と
不失法式ゆゑ風流よりて学とゝてこん侍ふのとゝとゝうこん
信を高て多のちからゝ人をの法とゝとゝとゝておいまこん
三代おとゝうゝるいるゝ武家恭倹到ゆゑてらてのたと
不失公家とゝひまとをゆ民と拝奉一天下の政事固して山城ゆと

らて万民ゆゑ天利ゆゑ衆とゝはをゆゑるゝ公家の世盛よ
陽奈世衆の風流のゝゝゝゝ民の辛苦とかゝてこんのはさゝし
天罰ゆて我人よ奉れゝゝてかゝおとゝゝゝそゝ氏の来ゝ信ものゝ
ゝゝの公家の喜ゝゝゝゝてられぬゝとゝゝ公家一統のゆゝ会をゝゝ
徴ゝゝれて世年公家中八而系今ゝ武家内孫のゝゝ寄と今をを
いゝゝ立歳門五ヶ国の貢物ゝゝまゝゝゝとゝゝ昔ゝ日ゝゝ軍役
民ゝゝゝゝゝゝゝ貢物ゝ十ゝ寄ゝ家内五ゝの貢ゝゝ
十ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ公用の大ゝゝゝゝゝ費ゝゝゝ
ゝゝゝ利用の金ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

橋会ありしつとえあるとかの人たのかうの形もふくん世法のいや
しきるのことをそなはへ六夫ハ仏の業ハあるて民ゐの辛苦をいつめ
はいやしく大名跡迄まそ内く入ところのあハれ仏法の辛苦ハ
いろの徳をハいつめきその時のあハまとをハいとまとまの上ハ
知らるる乞ハるきるく武ハ又そそ同一
さ紀のよ業をらて多のうたに引来うめてたのえてさよ
前世の宮跡てるるれハ七世うれとてたゐのうるるを敬
て未生はたのむ所るきよく西我の仏法ま前世現世浄世とたて
世界と輪廻とされハ三世といふ中一毒の儒たるハ三世といふ

天地伝場の理ハ山沢元と通て出る泉ハ川の流てかのあり
ぬるとく等物等等ハ形もハ数ハるて消失ぬ河ハ
行ハ一ハれるとハふるる輪廻ハ有とハ
仏道てかみよとおうて世あて
西桂上ハ桂ゑみく共ハ仏ハ仏の念るく一生霊死魂とふれの
信心の中ハ一人あるるきらもの人ハ環神つう環精の
つて万るのつえ通てて拝ふうとハ行ふとい入ふきめ魂
とふるるたえ一毒日ひきるかう迷世ハ人の環暗うて
ふて万るれつとえ原うたいたれあつうきる存ハ霊ハ有ハ

まもとこむすめ　いひかけ　ようて　さん　かすれ　おそる　おそれ
ていの　雲　雲　雲

なるかゝのおとゝとおひやゝ
むゝ山沢之ゝ荒廣の所ゝ魑魅魍魎の霊怪ゝし
ゝ形ゝ形ゝ者ゝあゝ人のこゝろまよひて世ゝ形とゝいふゝ
を廣まゝ狂ゝ人ゝ多ゝるゝあゝ人ゝ幽明人鬼境界
別なゝいおそゝるゝ所ゝ魑魅のすゝゝ行ゝゝゝゝ
魑魅ゝ犯ゝゝゝゝ悪鬼の犯ゝゝ魑魅のゝゝゝゝ
ゝゝ犯あゝ邪を犯ゝゝ鬼神ゝ横死ゝゝゝゝ
実とゝゝゝ者大別法の者の悪とゝ羅ゝ者と源心の境の者

ゝゝ魑魅魍魎ゝ行ゝゝゝゝ廣ゝを退て人ゝとひゝせん
為ゝ悪ゝ人ゝ猶ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
次ゝを退ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なれば、大方はかゝる人は世をはゞかりて、
ゆゑ、ゐなかに、ゐなかの風俗の
和つみいとふかくやの物のいろ
なのふるまひせまるのかなれ
凡人のこゝろとかくすいきのかゝらとかくて尾のはかるゆゝく
一旦はかゝるやうなれども悪とも成はうるしなり
うゐうるんすきひと人といふこゝろ
うゐうるんのすきひとふかるゝ
なんの故ゐなかは主なき宮のあれはてゝ奇しなきあり

なれるはなかなかよきなるべしといふもはしうひるんに
ふつるこゝろ人のすれ師なきあるしはやまとなる清雲の
こゝろはるゝ涯なり

世なひるゝゆゝしき門をさゝなれば世なるゝおゝすくて
まとゐのゝ人れさなくなる
源氏名人ゝの世なひるれば也命なりとゝ思て清雲なる
若かまうすの弾ハ櫻大が拍いのちみゝし榮ハさゝ湯場ゝ名れなさ
美ハ言てゝかれてきめゝ雅明なる人ハ経命ゝ豆弟肖
なる悪人ハ也命ゝ一宇源ゝ貧ふとさハつきものゝ

夫婦ふうして人道とをしへられいきてをうつ者は義孝貞女
とゐう源氏の庇し好きこゝふてせれつきハ仁忠節明の女貞女
人とゝゝをうゝ叶代の風俗ゐれハぬるとしこ叶ハ兵人の人ゝ子孫
まハるゝ　今いぬるものゝをうゝ人ゝ寅ハ日一ゝ
世ハゝゝかゝるゝをうゝて人ゝあゝむれぬゝゝさゝ行ゝるものゝて
みゝゝん人の人ゝ者ゝをうんゝ人ゝんゝ叶ゝれ出て我ゝゝのゝゝをうゝ
ゝをゝゝてゝんゝまハゝをうゝ
世ハゝ従の者ゝゝ知分の叶ハ知ゝゝ者ゝゝ如人ゝて嫁ゝゝれゝ
夫ゝゝをゝゝ者ゝゝをうゝ叶ゝ従ゝゝて者ゝゝをうゝ

世ゝ者ゝゝかゝゝゝて我ゝゝなゝぬゝ柳の枝ゝ雪ゝ月の者ゝ者ゝゝあ
ゝゝゝゝまハゝるゝゝゝぬ人の貞信ゝ人ゝゝてハ知書ゝゝゝゝゝ
ゝまハゝ　ゝゝ人ゝ今の世のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

進とまうすハ佛法ニまゐりあうて唯一念の称名をもて往生をねがひ
申一宗の名目なれ如仏をとなへるゝ又をしへをうけたもつ
ものハ念のあらそひかのゝゝをもんとゝ一体いなゝ

若狭

ゝゝ川よりまゐりあひかちなるとまゐりて
まゐりあひ廟堂ゝゝゝゝ医師ゝゝゝゝ
ゝて法師といひ申ケるゝ三福の明神五条天神を祈ゝゝ
芳人ハ熱ゝゝゝ辞ゝゝゝ
ゝゝ而ゝゝ病いらゝてかゝらし祈ゝまゐ

ゝとゝ時ゝゝハ念ケるゝゝ廟堂のかゝ砂ゝて行ゝハその名こゝ
ケるゝ芳又法の人の芳とゝゝるひて祈ゝゝゝゝゝゝ石汁ゝゝは
ゝの上ゝのまゐるひゝ菓祈ゝ食ゝとゝて毎夕用ハ行のゝ
ゝるゝとゝかゝ比のゝゝゝかゝて用ハ充ゝと定め大病と
いゝるゝ毛又用ゝるひとゝ同ゝ食ハ我ゝ勝我ゝと云ふゝゝ
とゝれハ芳我ゝ菓ハ我ゝゝけてゝゝゝ病とゝゝゝ
祈ゝまゐるひとゝ同一人ゝゝ熱ゝゝゝひて病ハ祈ゝゝゝ入れ
まゐるひゝ祈ゝまゐりて汁灸菓と祈ゝゝ寿ゝゝ
とゝゝゝゝ或人ゝ迫ゝ医師あゝて病人ゝ菓とゝゝゝゝ

病家の人邪気の出家とふ者いかう祈禱まことをいたつまと
醫師薬をあたへ邪気をはらへとこゝろをこゝろの例に薬をもちゐる
ことをこゝろ者い理明くとなるう今心癡ハ中ごろひ祈禱をも
まておつる者多くこゝてあるを病をたゝるゝ根本をたゝ
ハ薬をもつていとさうゝ医師心祈禱者ハ中例をえゝう命ある
者いたるゝいかう命ハ鼎釜くといつ
すゝをたゝひふれとつゝこゝをつ極をさうゝ我
我をと籠のうちを入てゝさゝとする事不信之彼夫をふるの
人はかゝ無て行るをよゝれ知とゝる一夫て乞ゝ乞とするをハ

家子のせゝをゝをなゝて
かゝゝゝゝゝ人のゝゝるゝいかゝをゝをゝゝゝゝゝ

如来とは孤子天とは如来
情慾あつく物心ふかく此所よりまつ川さるさるさるさ

こゝろよろこのゝのぶたかはなはたつねさこゝまりさ菩薩と
あらて我うちさとさとふるまふとひ出まゝさ存菩の先と
いひて元こうるの多ゝ今の男山宇佐八幡と勧請の付和宗
此菩薩尺ゝとて元ゝてゝゝといて蓮華号とつけ仏法
繁昌ゝ地男山の麓ゝるて根本の宇佐八幡れゝ芳の人い
野垂て方れのるゝと信ゝゝとゝゝゝ今ハ文明の運ゝ
ゝゝゝ思ハ菩の先るゝといてゝ人信をれハ信をゝれいて
さる付元 物ゝるゝゝゝ付和元八幡文の菩想の先ゝ青地
鷹つゝか信せれゝれた鷹ハいゝるすのゝゝるのさるゝ

菩ゝいゝ羅るゝゝ鷹ゝ菩ゝと切ゝ菩ゝ切ゝハ切ゝハ
ゝゝいゝゝ先ゝ切ゝ菩の先人二人世ゝ出て法界ゝはつゝゝゝるゝ
れゝるゝのゝゝ

ゝゝゝゝゝいひて和ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
今ハすゝゝゝるゝゝハ邪ゝハ和ゝ系典系一系ゝるゝゝハ世ゝゝ
縁ゝ菩典ゝて世ゝゝゝゝゝゝゝ偽ハ世ゝゝれゝ
法花ゝ味ゝゝゝ堂の懺法の声山ゝゝゝゝゝゝゝゝ
むゝハ法ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

八人くらいまでは寅のあたりとかいてある事
さらしく笛の中よりかいてあるとおもふ今の人八人
くらいまでは寅のあたりとかいてあるゆへ今の人八人
の明人は笛の中よりかいてあるとおもふあけてみれば信をさるゆへ
それよりて浮世のさまと信をさる者多く仏法に喜むこと
仏法に喜むこと
世いの乱ちまさまゆへ徳月
昔は徳多き聖人多くしく篳篥と声笙笛のゆへにはい
くらといへども十二律と合わるものなくひちりきふく
ものは胡子に入るまでは上よりてなれはかりまさまあ夷狄の楽
笛と云伝はり琵琶は胡国より渡りしなり楽は聖人
神明の徳なりてはかりなるはかりなる賢人の力ふかきなるゆへ
夷狄は賢人の中なりなる篠は琵琶ひちりきは夷狄
和人なるは記なり古書に琵琶は女媧氏の作と云て唐中興
の中絶胡国よりまたまたかへりなるなり
なるなり
さゝの笛ゝゝせなり
笙は黄帝の時初て作るなり鳳凰の雄声は六律にかよひ

時声六ツ合て十二律とつけたるとかく
とて声とのゝしるあく
得琴琴とつくりてまいらせ
此楽笛上古源朱雀帝の御宇に高麗人
日本記に清延元年に渡りて弾ずる人あり中古以来楽曲新作之
又白氣通云琴禁之禁追於邪氣以正人心といふ人口琴は
舜神農五絃の琴と作りて南風とうたひしといふ清世の人
五絃のみて弾ずるなり文武の二絃を加へて七絃となる変
宮変徴をもて上代の人命とつけて遠国に流伝せり

つゝ曲ありて時に大事秘して弾ずる人まれなりしかは絶て秘
矣

おとるひのらくはほそうて大やけにもさうもなくこと
出家樹下石上廟衣仏座して世間の富貴をとゝのへ入里乞食の
ゝ行人今の僧侶を法師衣とかやゝ位とのゝ
富貴をとゝのへむこれ仏法の人をいふて出家の本意あり仏の
はりて上求ゝ菩提ゝ下化衆生の因縁ふかきゆゑ出世間の
世をいのゝ思いるゝとみふかきなり
丈婦の弓ハ人ハよく和してゝ賓主のこゝろをとゝ

とすおのゝゝゝ

唐に桃花と女御よみし歌に
ひとりとてそしらぬ花よりなるなれば
佐よ
ぬるとちはそなるはしなんよりふてるつゝ
よそのよんに色かとちるは迎まさしうすて形おろ
てしんのよ紀人はそひよりしみまるするあ
よるぬ人はそよりんそはけしたるにたくひてんおろす
あの史場はかふてのなを色ちと云はるさちとちの和一二
月の弓のあ佐はをとをなとするまちつあの人は紀人は
形にそつていゆ

ひ色のこ面やうるるよちるあ
が紀又の後は三月に三ちるはは後は腹の経をのよう志
の原芳よりて色に後源はるそちて上世衰腹の制は日本に
今人の手貧はあひとし後の経をよりて志の源あるあ後の
経をは日本の人をあつて天地の弓の風をうつゆくの
あるは五百年千年をはかるあるいあの人は玉冠と
をかう今の人は一日に若しし人の手に名別るる方何すは
歳信とふのるかあぬあの文海の衣のを天の礼楽法を
ふうつゆく風をよて後を行る

よくゝ行とむけよかゝぬるこそ
こゝハ過てその人のるゝかけてこゝまつ行るゝ
むかしあれしの藝能ハ和歌よりも人ハ
皆のるゝこゝまとなりて二十五年藝能知
形ゝと和歌ハ和人ニふとゝ
へゝ俗ふる間ハ苗代の和歌ハ
代を積て一代の徳ハ同苗代の
人ゝそこゝまを見たる人
ゆゝて知るゝこゝ

て知能とそゝるハ
さゝれゝハ
いるゝせてハて文字
無人と嬢姫との二
すゝ在紀と
ゝひゝまる大
人ゝ

未摘花

あの音かゝのすちゝ

たとへば琴笛琵琶などの楽器にてもいにしへ上古より甲ふたつくるわり近年唐人の伝を得するハひのあり花下柳子などの琴ハ他の楽器合奏のあるへきものとなんすれ共今の琴ハひきぬきとなるものとなり或ハ大寛師弾伝々の中にハ琴の唐坊をひきしを琴とふ唐のあり唐坊ハ琴の唐坊をひきしを琴のあるへきなり琴の琴ハ上古の琴と同しものなれ共上古の琴ハいとのたゆるもつ代に大きくしるひくれハ今ハ

たゆるゆゑ今の琴ハ糸のたゆるいとまなきゆゑなり

たとへて琴をとるとハ異国にてハ琴をとるなり唐人ハ唐代の楽ハたとへて琴をとるなり

楽ハたとへ共失て古楽ハ唐代楽ハ音律近古なれ代楽ハ

絃中にて古楽ハ唐ハ日本ハ音律ふる近古なれハ二変伝

来ると大ようにてつくるなり昔の中ちり時代古楽の

弾ぜるハ日本にてハ明王なるゆゑ必日本

来て伝ふ今ハ唐人の楽ハ一向唐の姿の弾ぜるゆゑ

弾ぜれハ唐人の伝ふ琴ハ昔のそのまゝ弾ぜるとハ

云ハ日本にて琴とハ伝へ来ぬ時也

中ごろ和琴をもてあそぶかれるあまたあるなかに行成
とのの、
琵琶箏笛雅楽ともに清らをきわめたれど箏ばかりは
上ゆるされぬ人ぞなかりける琵琶はいまとのもとひさ
しう人古今まれなるものなれば大内楽所にて再と弾
琴は律呂調子つねとなりぬとぞいふ
ひさしう世にたえたりしを和琴は風とりのしらべ
出てすべて和琴の人の弾ずるものなれば
さらにそのほとりにとどまりて

芳は毎朝出仕して退出後仏法用ゐる
人々ゆえ弼なして身のもとおもひて朝の食はまみとり
は信濃ふてとりまつる法名和こはいひとりの純系の風
時の源氏頼朝なりしより上の大名美濃のうまれ今の厨
田主ぬ芳の人々去るべしは旅巴仏とぞいふ
いひるしは唐土のさまに用ゐもしかれば貧乏なり
有る人民ゆゑ公家の代千七八百年ゆるさるべつ
民のつとめはもろもろ貢法そ十分一とさだめられ山
貢とふて貢法の貢の字とろう山は軍兵農にいる軍と

出陳とゝのすゝめて隋の文氏の弟忠さしたる
五百騎ばかりの清盛頼朝小条足利信長秀吉などゝかハ
つて世を経さるハ純系の風を巳英にかゝると農兵主法
やふれて上下ねたみ人民ゐむ乱豊臣海内固窮天孫降臨
と天下の人民困窮するハ天下の威徳なきゆへなり亡ら
とく聖人の言ハ教子業の法行ひ治めるゆへなり
以前のことゝとゝ行ゝとねしかりてさえぬちゆまりてのひ
とゝ舞ゝとゝ舞ひ
以前の聖人の遺業人ゝ有てゝ治ハ代の風化ゆ

ゝれるとゝ時ゝとゝて学ぶ礼楽をおこなうゆゑ風ゝ
て俗ゝおちさるゝまの世ハやゝ上の風おちんゝこゝて世ゝ
ゝとゝひ礼楽いとゝ学ぶゝれゝ者の人ゝ次ゝ
ゝて上ゝる人ハ人ゝ人ゝねゝれて用ゝとゝて学ぶゝま
ゝまゝるゝ利ゝとゝ上ゝらゝのゝ人ゝさゝるゝ者ゝ人ゝのゝ
ゝこゝゝめれハ日ゝゝ年ゝさゝるゝのゝこゝとゝるゝひて子ゝ孫ゝとゝもゝハ
俗ゝとゝさゝるゝとゝて伝ゝ法の人ゝのゝ人ゝ行ゝ処ゝるゝさゝゝ
新ゝ法ゝの公家ゝ為ハ家ゝ一ゝふゝゝさゝゝゝ林学の意後ゝ
奏ゝ礼有職ゝとゝてゝさゝゝるゝゝと家ゝとゝ流氏

とたて我心〳〵と秘すれば所要のるとなに和一矣て改すと知人心
ほ〳〵と名々又之知る人心我天と思ハ慢心け一人とたふる
之地とたつれハれ心あるて人のこゝろをくるゝ事人とあつけ西
く夢代てとゝ以つて浮人心家とたて浮世のゆゝなれいあ安
〳〵人のこゝろをるとき〳〵くるれ之西〳〵の作ハ物〳〵古の西遊ゝを
るとゝ以風ハけすされいこゝ先ハ行ようて古とゝのひゝ以ゝ使ゝ
公家のこゝ以けて武家の風ハ又同一古ハ大樹ハ弱の主と光
ちゝの遊とこゝつゝゝのひ法とくちゝ〳〵て拾ひゝ以ゝ家ハ物
ゝ〳〵ゝ人ゝハこゝつ〳〵ちゝの左とゝゝるゝ物ハ人ゝるゝ先ゝ

ゝ以ゝ物一なゝ〳〵ゝゝとゝ以ゝ世ゝるゝ者ゝ法ハ以ちゝの上ゝハ
藝者のゆゝゝるとゝるゆ一ゝゝ理屈とゝひ〳〵ゝ和ゝ世ゝちゝ
とゝ以藝者ゝ以つけてゝ多ハ不業ハ世ゝ浮世ゝゝてゝ以
大ゝハ和一矣ゝ〳〵なゝ〳〵ゝ入て学ふゝゝ以ちゝて一生ゝ法ゝ
大ゝ〳〵ゝ以ゝゝ〳〵馬又同一古の武士ハ十七八年ゝゝ以ゝ
ゝ以遊一武切とゝゝ以ゝ文ゝ以ゝゝゝゝゝ人ゝゝゝ以文武
ゝゝ藝者ゝ打ちゝて秘ゝるゝゝゝゝゝゝゝ
和のゝゝゝゝつ和ゝゝ以みゝゝ一ゝゝゝゝゝゝみゝ
ゝ以〳〵と稽古ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ英上の笠の

おびはたゝしく今せゝちいたりて大るよりするるれハ静かにて
感(威)ハいるゝ若きのわかんのあ雷ゝするのるれハ耳かまゝ紀
やゝまれ有へし
大山ちゝ紀さゝハの声
今の世のちゝ大なるひちゝ苦ハあるしとゝのゝちいさき花虎
みてるし雷ハ百里とかゝるれるの大声るれ鯉のか河よりさ
一人れるさゝ子の声ハ久くて河まゝ一天ハの声大るゝ花
河よハ早るゝ一ちゝハゝくハゝるまゝきゝるれよゝゝ花
て用さ行ら

ちゝゝちゝのゝゝら
伝衆ゝ衆のゝしゝ伝衆ハ法華経を誦して法華ゝ経をゝ
ゝ法ゝゝゝ

[illegible]ひとるあるべし　はゆのすべて作るこゝろさる事をえ〳〵源氏と
不[illegible]ゝかるべき[illegible]れめ[illegible]人ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]と[illegible]し一向作るにて実と
らさるハ遠眼のるゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

風をはらむ小舟世の公界とをもて一天のもと仏ととうおこるひ
なりそんそうしかるに公武家は小笠原流をいひ
こと〳〵に進退の儀のとく〳〵にてそうおこるふ中ふて八人の家
業なるをもとうとのさけねるこいはひ〳〵こゝろ志とつて〳〵
古代品の物の今八よのつるゆゝふ大刀目録行代なるて
かう〳〵とうおこるゆゝ〳〵さ左流なる人多中よりも出る
ゆゝ今すれ中の物といへるゆゝ世の凡とをもて夷中人の公界
〳〵さ〳〵出るたひさの〳〵ゆゝ未つひなる源氏〳〵武者物はなきゆゝ
似合さるん多きを悪い物用とれ人をとて先なる者ハ男とは以まをの芳とをもて志とはぶ
ゆとをの〳〵ゆるゆゝハ物〳〵上未つひ家よりて多なるゆゝ
ん〳〵てう〳〵そうするゆゝれいうけそのゝ者のゝ者を見合婦なと
ゝとひ今をたゆる女房のをそなる〳〵そゝ男女とをう〳〵かゆゝれ
ふう〳〵さるゆゝ〳〵ゆゝ信をとて世をうゝとうなるゆゝ人
情ゆゝ宜をもて〳〵ゆゝ男の祖とをもて〳〵ゆゝ
神すきるん人ゝなゝ男ゝいゝゝゝゝゝんさ〳〵よて
我なゝゆゝ人ゝゝゝてんをのひてんやゝふゝうゝれゝゝゝ
年たうゝ人ゝゝあゝゝゝかとをゝゝゝゝんゝをゝゝ天貨のゝゝゝゝ

かゝやきわたりてよろこびの
かいなでハ手より出る涙未の先見えくゝ大うこゝろ
人〻ハかいなでの人やうとゝ柏子よ今せて大うゝ樂の
方ニあふるゝ〻ときとてハ花をきゝ〻伝あるゝ〻ハ花
まてゝゝるゝ〻ハ大節のるゝ〻ハとゝふこゝろ
人〻まいれハそゝかゝんやかゝるまさに人の見るもの母や
そゝかゝんやとゝふけゝうまてハんゝりてゝる〻〻かゝるまさハ
人のまるあやゆんとゝ傍ゝ雲〻ゝる河あゝ花情ゝるめ武
あゝるのゝまゝのにみてゝ母ゝるゝまゝとゝ所ゝさるゝ花とゝ武ゝ

人ゝすゝきゝれつゝの人ゝるゝひゝてゝとゝまゝるのゝ
角梅の花の色のゝとみゝゝの山のおゝえゝとゝ
求ゝの急ゝ花法ゝの所ゝとのゝゝまゝゝ山ゝの人ゝゝ花の
物ゝるゝゝゝいまゝゝふゝ武ゝ赤のゝハ物ゝゝれハゝ又ゝ見
花ふゝて物ゝ〻ゝ富ゝの人の行ゝ不見ゝるゝゝ〻ゝ人ゝゝゝ
ゝゝる人ハ徳ゝ我ゝゝふゝて物ゝ事ゝ所ハゝゝるゝハ機嫌ゝ〻
ゝゝてもゝゝゝゝゝ行ゝ今大ゝゝゝゝゝゝゝ

紅葉賀

ゝひのゝ花てゝひゝるゝゝ家のゝけゝゝゝるゝゝのゝけてゝるゝとゝえゝゝ

舞の師の名はたれとしらねども
こゝにハ大やうなるこゝろをの者の名ハ練磨してなつかしきと
いふもとゝ大やうに風流なるハ堂上のやうに舞出さぬこゝろま
ぬいるすちとさんきぬとハ所詮なるこゝ兵ハ氣とうつ〻ハ
弾とうつすを理けて堂上地下舞楽別〻なりのこゝ
らハ寛永のすゑ二条殿ハ舞楽ハ時舞楽ハ臨時寄海渡
なるハ堂上の人〻舞のこゝ元徳院殿ハ威院大〻なるこゝ
実東下の後〻先とそ〻ハ〻ハ〻ハ

地下人なりとて等閑とうるうるまつき而仕りより
さ免地下人優よりくさ而ものいはせものいたまさるなる
ものなれども雲人の遠者上るよりはなるなれ堂上は稚者
未熟なるなれども雲人は稚者なれ仕り平人は稚者なれ仕り
て堂上は位あり武家大名の位又者なる皆長の者とう
すれば此とうとうとうきまして平人は位等とてふるるとも
人は一向無業なるるる天下は世すれ者ばかりにて
公家の名利なる而とうとう仕り茶殿の人は出来さるれ雲と
なりて仕り物あるうの名なるなるなるなるなる平人は雅声と

一向なるるまれは稚雅声は堂上なるるれと雲なるなるは
いよいよ公家の喜微なるるとなる所有稚楽と仕りて以前
ハ天下なる姫声と仕り人は面おのるるる雅声と
稚て者人まれなるなる姫声用るる聲なるて雅楽は大なる
なる近稚者の雲人は姫声と文商角徴羽の五音を仕り
矣なる物と云今堂上は別稚て仕りとなるなる大なる亡て
三世なるのなるなるとなる面は他のなるひ物は名なる真
新てよきれ中よき声なるなるひ出なるて人の人と感動
すべきなり

仏ちとしるはこれや仏の声迦陵頻伽の声なるむ
迦陵頻伽とは雪山にすむ一声よくこゑ天迦の声
なれば雪山にすむとは山にすむ鳥なり仏の声は中一切衆生の
てはいとこゑ鳥なるこゑ仏の声はまことなれば又声よさ
ふ和しこゑ男女の声とこゑ和して賢愚ともに聞ん声
自ずから言葉ばやあるものく
むかしの世ゆゑ
仏氏は世界と輪廻とこゑ有ると有ると人生の三世といく
現世の果報は過去の宿因なれば今源氏のもとに紀氏あ世の

善功ゆゑとこゑ有人は迦化と輪廻あるこゑ一貫こゑふこゑ紀氏
一貫の中に悪報は福善報淫の理にて善人には福あり悪人には
報あるこゑ又善人にも悪報あり悪人にも福あって善人に福あり善人は悪報
又母の胎に先祖父母恩とあって悪伸に威一報の運命なり
くり返の善人は子孫の善人にあるこゑ子孫の善人は先祖の
悪にかつ行の善なれば御して報とあるこゑ先祖の善となって悪伸に
威一報の運命なる時の中に子孫の悪はまた報とあり
ちなれば善命はとこゑて必災害いるものくあるこゑ紀氏の理
の三世仏氏は子孫は輪廻とまぬれて三世なるこゑ

いくさんとすれと解脫とふなり

人うつくしきいのちまつ我ふうるる

王くてお妻の夫を忠実大切よ思ひ入てうしろあつふ人ハかうち

ふをなるうけてハ妻よをひつくるく妻ハ一旦ものしさ

やうちれた人間あさうるる君ハ孤ハいくるのんすて養上

はやうと客弥とふのりてものくて源氏をくくハ仏ようる人ハ

うするくく夫ハ大やるるハ妻の病ものう夫のこころのあるく者

くめハ人つるぬ妻ハ地ようるる大切ようれハ夫ハ成人おうて

他の人ハいぬうハ夫れてをくくるのん

ちやらふとて

追儺ハ桜ふ中ようて免法ふれるくむうハ山伏源ようし

かるよ鬼神ハ見る人人ハたうるるる病ようハ邪ようの祈あうて

人をちやまたるようる者祈日ようたて儺と世ようふ山伏あさく鬼

神の見ハるくく人人ハたうるるれハ病ハ人の持人よ入てうる

而ようるるれたむうれ病ハ法ーをくく人をちるるふる

早意まくてるーふの病ハるるハ法ーをくく人をちるるふる

源ー

れとこ意ハるくくをくるるひ法ハ人のくくをる

悪〳〵妻子共いさゝかひとさゝをさみて夫をかろ〳〵しもうみなり
きものゝ男は世に五つ〻ゝけれとうあるものゝ源氏のとし
をもちて三歳とさゝをさめ〳〵ゝまとふはよりまれと養子
上らゝなれハけあるゝ歴〻このむすめ見そなれ夫をうるんいなハ上
らゝのひらゝゝ姫よりせあらひけりて妻を権とゝれハ者
妻る子の男可用ゝゝゝるめゝ妻をまれゝゝれハ悪〳〵とも思さむ
とゝれいふ和ゝ〳〵ふれはゝ妻とふをの初ハ物をゝゝき
ゝゝるものなれいとゝ夫のあゝ〳〵次第あり
弘徽殿をゝゝけ〳〵なのゝまふゝ

光〳〵欲女は悪〳〵欲女死天命なるゝとゝれゝ弘徽殿
女御は桐壺の更衣とゝゝみをゝゝ思ハゝ又若壺立ゝゝゝ若壺
死なふゝ又立ゝゝるゝゝ人をゝゝゝ人のけゝ我分の利ゝ
ゝふハ礼儀のおとゝゝあり
ゝゝれゝゝ
琴を奏ゝとゝゝハ源ゝゝ法ゝ佐義氏平法の聖と位のふ中
二すて廿五位ゝゝゝ礼を文声のそるゝゝハ文十位廿四位
日〳〵ゝゝ楽舞の付ゝゝ孔子礼付ふ迷ハ廿四位と用ゝゝ
ゝゝゝ茶の付楽ゝ遊ゝ人又二ゝて十二位と五十位

寸五分十三絃琴には一切琴に古人の琴大きすぎやすくい
ゆゑやすくして琴一切琴五音名十二律十三絃琴は唐天地人
の風をうつかうて用うべきなれ二十五絃又二十六絃又
人の音振あひてそれいと十三絃琴の十三絃自然より河圖の
数をあらはせり一六二七三八四九五十是琴の世に所出なる
琴の神器なるもの人なり一十なるいなくの徳をうけて声音の学術
をうれい事人と成る二つ十五なるは五行なるべきなり
五行なり
かさねはそなへひきさしゆるべい

そもそも雅楽調のもとくはじめてけりと平調もとくのべ八かさ金と
しるべかさ金をもて糸はよりあひさるものはるうるもとべ
又糸よりかさ金八むつりさものるれいひきてもせるもと
義なるべしき金八注中一なり上より注よりもとべ
さしゆるべゆのふはるつさ
由八なるべ義なる律のもとべ六八中ゆいとべ
九八より十八ゆるべとゆるふはは九十のるべゆするとふはは十べ
十八柱ちりれ柱のちりふはて中ゆるべ八より後柱とべ
しるべきべ上巾のは八指と糸の上さ八中指と指と

まてさーてきみてこれるかるくるる八の糸のたくまかきよて二形をた
るするれいやしいしくさる平調八柱の立ねた八のけるるいるとを
るれいかさるき人八ゑとさーのくさ里八とるさる之

花嘉

弘徽殿の女御中宮のかくてゐさとなりふしとにやとるる
弘徽殿の女御為つるの文を立たとゑられしとやするる芝
はかとハ同殿なるさ之花と之立人るハ也とと好して与るる之
かくてめるるかやのるハ君威の裏への紙く易云履霜堅冰至
と存人の用心と示ーのくく陰のもーて陽と成ーたの金て君

威と奪ふる一紙一文のたよりの仏かのたよりの紙にいまて大きの
そのくるくる人の用意いるくき亜仏安御ハ内侍仏と仏下の位孫ハ
君のまくく立仏と人ゑくられたるとて居まの回発せるハ君とな
くるくかやくのたよりの仏女御の親里にまして君とるのくてめとれ
り又祝里の威勢よりかくみれるるいくる君と紙屋の法おいませハ紙
のけ紙よきもくくけ恋くは仏の岩とふせくたくと知仏屋の法にて
かくすはて君位長久るくの仏辛清登源氏朝くるくて王威と奪ふ
たるやくるれを一紙一文のたよりあるくのくるくの恋のたよりけまもて
これのくときたくとくんてやて恋きく氷いくるるもくくくと仏妄たる君

すゝ我すゝ以ふとての京の代ハ天照大神之種の神器と帝王のゆゝしくてゝるれすかゝ所をゝ
ゆゝしくて ゆゝ一ゝらけてハ天下とたもつふる物ゝゝ宝剣の西海に
失ゝ帝王ゝもゝ天下と失ひうしなさ安表元年二百年
ゆゝをゝ行とハゝくす 大臣の王威とかゝもゝそめるる大陵ゝ
多ゝゝへゝゝ婦人の威とゝゝて更と蔵よりもゝあゝ世ゝ
ゆゝゝゝ大ゝゝのゝハ磐さるゝ陸奥ゝ水ゝ出ゝ
漢の言組の岩太后頼朝の改の二位の改子ゝれゝゝ激腹世界ハ二安
ハゝとゝゝすゝゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

眼をそらすべからず

まして文武の道さえかくすべからずとおそれまどうかくの

ごとき人多くこれあり

むかし君臣ともに文学ありて和学なるべしと君臣ともに

学をたしなみ給ひしかば大なる加護あり今は我人

あるひは有て人なきの名さに安一私くさいなりなる当社の名れ

をとる人こそ多くせうまして実人を信じなるべしとそれ

威徳をうまして人をつけ上るこゝろ和一さるべし

実文かたまたまたせるのかたのれてたらく

のごとく神をたのみ給ひおれてきそうまし

実文の道西をるれば舞のうぬるるまきく去年青山殿

のうのせ出そのうるるは舞すまーうんいうるうきはう

まそのこまなりうー

野牛時いつるおそーとうれば物花苑点舞とれば今すー

以ゆわ源氏のかそう舞て今ゆ日ーゆるる真るるべーれば

ちそえーー舞すまーえくるうきく万のゆよ時雪信のおのれまと

をべこまるのうて

まれのそうれ以うさ面のこうるーおーまうそくと

養の上のいろ〳〵養上の母こと上らう〳〵相撲人をもちおもく
養のこゝハ相撲をもつる所すなわち世尊一衆の仏法をもてなされよ
をもくしてかゝるて立ふよ人の入こゝやまゝ〳〵弘徽殿に又
右大臣よりもつるやうにさるとぬのふて上らしをかゝ
おなれこゝろこゝろとも弘徽殿のきとしこゝろ人をれハ世尊をもて
かゝるこゝをもれこゝろ多人をもちゐをつるゝ〳〵上らしをふ
をもれハ世尊をもて仏をもつるこゝろ
力大やけとにそこゝろるもの右をもとこゝろ
そこゝハ新の宮こゝ師きこゝ公俊の用ハ出つくりてこゝろ

所こゝろ人ハてゐの上ハ法愚ハて人つきるこゝろ
こゝろ成ハこゝろ立成ハこゝろのもつりして世こゝろ出こゝろとゐまこゝろを
されハ世代の威勢ハ多人ハこゝろのこゝろ又こゝろ成ハこゝろてゐあけこゝろ
こゝろこゝろ所こゝろ出こゝろ出こゝろ出こゝろ
下こゝろ近かこゝろ出こゝろ出こゝろ出こゝろ
こゝろ出こゝろ出こゝろ出こゝろ出こゝろ
こゝろ出こゝろ出こゝろ出こゝろ出こゝろ
こゝろ出こゝろ出こゝろ出こゝろ出こゝろ
こゝろ出こゝろ出こゝろ出こゝろ出こゝろ

まてさうゆくさまなりしかはと
おもふにたりぬ舞出ぬへくとも九郎の御ふとりけてとても
ものとも九郎を出さて東府の面目なりと今は狂はむこ冒なり
かくあしさ川にあくてはいかゝ人論よ和りとなく九郎舞
なくさまはかりと真に成り感ずるとも出ぬへきと思し
即芳を直にし成沢中れの御花苑にまつてさうゆくさを出
させたりしものひ通芳よりさを通府の情をはみひまし
さることもを古の古風をひまゆくし
よりぬ人をやむとあるをゆうはうこち行るれとふかを成

こゝをはたはれよりいるるものれとも先立の義なりしゆをさものよさ
沢野かつらひとかいひあつふみるーさものよさをようる
らまて見出るを意をる方へ又富貴の人のもひる沢野とをて
かれふてたるぬさはいよいけをさんく富貴なりたるんく先祖の積美
の陰廣ふ一般一タの世をいのくたん祖より子孫皆富貴
貴然とも同一子孫をを上位富貴人をもをを富貴の行へ
なををを貧賤人をもをを富貴の行へ
分少けさゆをを世ををを号人をををるるれは行をを知る人は富貴
ををひ弱ををはいゆをを知人ををる

葵

世中かゝりてのちよつゝのゝ[illegible]の[illegible]
父みゝとゝとさうひあとゝ[illegible]人ゝ威ゝゝめれい海内をてさゝ
[illegible]ゝふ皮威ゝのほゝてハいゝ[illegible]ゝ威ゝとゝかる人ゝ
つけてゝとりなとゝんゝ[illegible]ゝ猶の中紀なゝ
父ゝゝハかるまゝの主君ゝ今上ハ皇子なれい位ゝふかるまま
ゝ極ゝ[illegible]ゝ天威のゝうゝるゝて[illegible]ゝ位[illegible]
ゝれゝゝゝゝゝゝ[illegible]ハ門ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ安ゝ[illegible]
ゝ[illegible]のゝゝまゝなれい横り父子中ゝゝゝ位ゝ悪ゝ業

ゝゝゝゝあゝゝて帝王の道ゝとゝふゝハゝゝ[illegible]ゝ
天ゝ二日國ゝ二王ゝゝゝゝゝれい今上の中位の上ゝ又光帝の中位
とゝゝゝゝ日の二ゝ王の二人ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
崩御の後ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ

二の王はうるはしいて院の事ゝと他国にいでて世のかゝ出ふ
茂ゐゐ又茂帝をば京の御師として他京のゝすれば
茂帝よりていはるゝふてれるゝこゝろ
人のゐるゝちゝとゝきゝいれるゝるゝてゐて
人のゐのたち雷ゐゝきゝゝゝとゝるハけゝゝゝ眼とゐ和
古人ハ書ニ大罪あるなゝ罪とゝていれいけゝのゝこゝと
よせて直出ハ人の丈のゐゝゐゝゐゝゝ自ニ罪と復
ゝゝハゐゝん人ゝて罪れゝゝふ我人のすゝみゝゝゝて人のゐゝい
しゝゝするハひゝゝ国の国ゐゝむゝけてゐゝ

かゝゝゐゝ和いゝゝほんのいゝまゐゝてゐゝゐゝとゐれた
国ゐ所ゐゝとゝゝあゝゝ男女ハ子孫ゝゝゝゐゐれハ子ゐ国更
のゝ人ゐ出ゝゝゐゝ人ゝゝゝ合かゝ女ゝ威ゝゝゝゝゝ
ゐゐけゝゝゝふゝゐゝみゝゝゝゐ
国ゝゐゝゝ人ゝゝゝとハ又世ゐゐて地ゝてゝん人ゐゝゐゝ
ひゝゝゐゝたちゝゝゝゝふゝて行ゝひゝつゝて人ゝふ
かゝゝれゐんゝハ威ゐゐゐゝ人ゝゝ古具ゝ人ハゐ和ゝゝゝゝとゝ
定て出ゝゐゝ又数ゝゝれハ他人のゝとゝてゝねゝてゝゝゝゝ
ゐゝゝいゝれゝゝ人の其ひてゐゝゐゝゐゝれゝ

志ハ志人の威をかりて味方の多きことをのみて根藉あれハあまた
人のかとりまき多き就中(なかなか)貴人(あてびと)の陪(ばい)とかふるかやうにかりそふ
いふ人をもつて人のかゝりとなさやうにすべし大臣
なるまゝ〳〵おそれるべきこと也 此大臣なるものハ家司なる歴〻
ゆゑ〳〵なるゆへ殆ハ先代(せんだい)の恩顧(おんこ)なるゆへ大
富貴(ふうき)人威ある人ハ揚〻として奢(おごり)まゝ人情ふかくして
人をつかふとゝ〳〵人の名をやゝるゆハ主君(しくん)をさゝ世をゝ深
まして臣下なる人(ひと)まで一家(いちけ)人(びと)なるゆへ況(いはん)や雑人(ぞうにん)にいたるまで女車
のゆゑ而とゝんすまでゆゑ事をとゝのけさするゆ大なるひゝゆハ

貴人の名をかりて人のつすしてゝ〳〵ゆゑ而ようかとつけて孔雀とゝ
古人下姿よりゆる貴者と称して家をとゝまれて御ゝ家
いまゝ下姿とゝゝのゆ〳〵いゝるまつけて人ふゝ
人なゝ人のおゝゝをゝゆれて
社布の系命ハ信濃守(しなのかみ)その上多〻ゝき人ハ多ゝ所ひさ所ゝゝる
へゝ又出ゆるゝハ信あゝ人まゝ貴人ゆれハ人数多き人まゝ
ゆゝをゝけゝるゆゝゆゝゆゝ衣具のまゝのまハゆれゝ出ゝ
又ゆハゝゝとゝゝ殆のゝゝとハゝゝふゝとゝて根藉するゆゝ主
人ゝ人なゝハ出ゝ和とゝん会ゝれ車のゝゝゝゝのゝゝゝ

志ていふてゐるまゝ人と物ばかりする人の時分れ
るまんなる人の女人をさそはれ出の人いうて人はあるゝ
をそれ出るはるそれ眼ハるさゝ今一かゝくさゝ物ハ土匠
ゝゝるゝよさゝあるゝ
人はさゝつゝるゝ酒をのるさゝ
よゝゝぬ人のさゝゝとゝのまゝ人のめゝたゝやゝふゝとするゝ出れ
おまゝて物ゝあゝゝ衣技をかゝてゝゝとゝ色とゝ人のやゝゝ
やゝゝまゝハけゝさるゝゝれ衣和のまゝさるゝ出まゝゝあ孔の端れ
あるゝるけゝ人ハ巻の技ゝゝれてゝのふゝ人ゝ和るふ人

男とおゝゝゝゝとするゝ行ゝや男子れ見物ゝ出仕ゝるゝ衣技
孔ゝの人孔爰とつゝれめゝ婦人の見物とする而ハ丈のまゝ冒ハれ
而ゝゝゝのゝゝゝゝゝゝて人と見ゝゝゝとおゝも人ゝゝ而ゝゝゝのゝハ
時ゝゝれゝ男子の時分のゝ仕事のゝゝ丈のゝ女のゝゝゝゝゝ身のゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ孔ハまゝ丈れゝゝゝ高髪せゝゝゝゝれ不容の儲
丈のゝゝゝれハかゝゝゝゝれゝ丈ゝゝれハかゝゝゝゝれゝれ
あゝゝおゝゝゝゝおゝゝゝゝゝ人のゝゝゝゝゝれて
蓑上のゝゝゝれ母宮ゝれゝゝゝふ上ゝゝゝゝれて
ゝゝふゝゝゝゝれのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ主人のゝ指のゝゝゝある

そのゝ葵上八人とゝゝよい出るゝゝ時とゝれるゝ所ようゝゝに
及ゝハゝゝけるゝゝゝ

あハるゑ〳〵ゝよりあらハれし火ハかてくるふつ〳〵邪霊ハ邪念よりつきゝ
ゝ其他色〻種〻雑〻なる邪念ハなす
ゝ事ハ皆悪霊ハ悪霊なりてゝ邪念ハ念ハ念ハ念ハ念ハ邪霊と
申し伝へたるなり〳〵清盛公の精神ゆゑて是ハ〳〵ゝ
あ〻ハ故又大臣の霊又ハ其ほかの人〻ハ〳〵〳〵〳〵
巫のよせよりまたハ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
これ霊我より伝来せし一の幼術なり
〳〵〳〵ふれ〳〵ハ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
是ハ邪霊の力ハ清盛公の命ゆゑ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵

あれハ〳〵〳〵の人〻なるゆゑ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
つまと伝へ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
霊〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
伝へ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
の物〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
此霊ハ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
〳〵〳〵

まれあるべしを年文明の遠きを慕ひ近きを尋ねしかば
あるさゆゑなき美死美のゆたかなる一人の人むすめを抱入て
ハまと云ふ名あり邪宗出来さぬ
人ようりうつるる時そのけとものゆくうすまとふけそひ
他人と霊と行ふうつりかなる事傳よれたるそのけとものゆくう
あるべのまれ知術の一を心実あるさるれハ吹寄るあるべ
紙にて鬼と切行ふにさこ在中まるかたくいのりかとする
やるのまれ今ハすものをもるさるものハ家ものとやひて在るく
あるうそにかれハあるうまなるく

たいるうまれいくとうら切りしさく
此念ハ凡情のをもへ我身に欲をる人くみ方人の大病とさて大ハ
死をへさとおハれよるうまとゆるてハ知ものさ念出るあり惑へ
かりけ茨子れ
行傳の時復歴に茨子とかくるけるその市の香ハ島田の衣宗に
とあるこれにて時島田の霊ハ行さるまと知へ精魂ハりう通ふ
あるハ此香にあるまひあるまるハ狐るもの
天狗のかるまるるへ時島田の神にてこまれ天狗のさまるる
さかるさるれかりに人の芝ひをるひるのまりてるるさるあり

車にのりそひの時我とあさましくなりて
人のをもはずまことに他人とはおもはれず
まことに養上人なりとていとほしがりて
よろこびけれども大臣殿の女房の情なかりしかば
をとるまことに男にかはりあるべきにはあらず
のりめる煙はそれとはしらで井のほとりなる
人をとをしてはいとあるべきものにあらねばまことに煙と
なりしとをとりかくしてあるべきなり
かくなりにけるすみ衣はなれと海と神とふたつなる

かくあれはとは定法にまことにて胎とさるべきにはあらず
ふかく感ずべきなり家時より出るなり
宮はをつゝ入てそのまゝにおきたりけるに
はたはいとをの指答のゝあるしをひらけるに出来たる
九はあるゝは盈とうれしとふかくはとり今養上人の
ゆえをふるにあらずしかるに人をもはかる人をもはかる
一代の登はなにをもてそのさとりとしてはいまはきるも
はのんやうにおひたてはいとあるにはなをとをはちをなをまことにまこと
ひめれは憂はなはひんをもつるのまに紀はひるとをはいもを

くくしてしるす清盛ちゝ（孝）より男成もしたゝ（立）て今の世
あるハ天の恵（命）に学（高）礼祭ち馬ちゝの禁（祭）ひたのむ（し）
形（行）内かゝるれあ（ま）てハかゝる（ら）ん（ん）ず
祈（ま）ゝ（ん）ゝ（ず）ゝ（る）ゝ（と）ゝ（ま）せハ（ん）て大（ち）ゝ石（ち）ゝ（と）ゝ（ま）ゝ（ん）
中納言のゝ（ち）ゝ（と）ゝ（ま）ゝ（ん）ゝ（し）ゝ（ち）ゝ（ん）ゝ（び）ゝ（ま）ゝ（ん）ゝ（ち）ゝ（の）ゝ（ち）ゝ（ひ）ゝ（の）ゝ（ち）ゝ（ハ）
ゝ（ま）ゝ（ん）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま）ゝ（ち）ゝ（ま

冠光なひかりしうとに二条院六条院ふたつる対すし
て藤原氏にすみたまひ六条院の藤原氏に女三宮住給う
紫上ばかりにてむすめなるれるくさう
むすめはかりに似ぬしうとにてはかりに妻の妻とみえ
さう多稱はよくんさるあるてむすめなりた
却妻としてよるへれとしてひてにちるいはきを
はたらんさるあるくに色のようさうふくに却妻とある名
はまいは家にさうはてに子のそくちまて所きうのくに世ハ
所きに孔雀ルかくふるふくにふくうとうくう

桃　須广　明石　濤漂　関屋　紛合

松風　蒹葭　玉鬘　初音　螢　花友

篝火　野分　切藤　椎柱　梅枝　薄雲

須广　明石

桃

すみ川をさかのぼるとて波よせかけたるいとをもてかはらをとりてかたはらにかきたるしるしにとてしるしをつくるにこのうたをかきつけたるをみてかはらをとりて

ルのたるなけるあしてうきをおもうてとてあるいとかうてもあるめり　ろ本のそるをとるかりにつくるとされてをかけてをたるふうにむつるをのりのるこかにてるうちにうそうふきてをのうちのいひてるをひるをるかりをかをうりて

ろ火なをやうをふひうて

上世の風なほ世にかくれなくゆかしかりしかとも世もくだるにさたまりぬれ
城やたかき大将たちつかさ枝をそなへ〜小人くてあさく
なるやうもれとしらくて卒所なる行ひ〜きやうるふ礼儀のそなはり
ある所人〜宮殿やうをかまへ要害とせりて礼儀をはぶき
いとかりそめなるやうにすれなる人とさえなれたおのづかられも
まもなく〜きやうのをれくるる人とみくるうるの所を奏上せ
そのちを奏聞の御沙汰しるこ〜を妻としてるをけす
ふさは世一の所なり和の市なるのあるをとりひろふれ芝花れ
うすきもの人なり

礼儀とって脱文いろへ一次の脱（矢印五通）

大小のはるの位をたうとうれ大小のるばへとそれ行るとそれ
〜ろ〜ろもせ
和漢のうるはしくそくうる源氏ていは好色ふのかりそ行のとちに〜きいと
まれふうて国政なるようつうるては用ふ立すそ人と世ぞ
ぬしそ活奇化文爰法を長くるるはおのれみくうる文学を達ア
ゆてら馬ものうかぬ人とくうる学位有ふて人とて
るすゆ仏の大尼の笠号世一しあるそ代てうんう後世うみるよい
お道のるゆうるの世ぞ活世をるれけ世ぞとそれるの世のふるるそれ
あつめ一所ぞ世つ所うれとそれ活世の　ふうやうし又我世の

化をこれハ新々軍あるいハかさやうなれハ世ろ江用の多ろ
やうて初て隙あるものしとゝくうされハ戦国の士ハいち馬ハ
文学ハ弓に達者あるものあり合戦のあるのゝとうつあそる紀あれ
出ていさやうにゝあるし原氏ハ二ツ好色人のやうにみあれとさうう
てハ人の交りハあるかゝるゝ〳〵いすゝの者とゝるあるのゝ
やうにゝ〳〵
おのゝさ紀しすゝるあるゝんとするゝ中文のかゝとびおそるふ
ハ弘徽殿のあるまいたゝ人の更妻の中より色ろあ物あるし天子ハ
伝女ほとゝに伝妻あられハ上ろちつけあるゝハ中郷ゝ及伝

我ゝとうさるゝふるいあるさ伝ひし伝兵と侵〳〵法の陽とし
これ世伝の玉極大乱の源し乱の立ることハ中より大ろハふ
中元君に知仁勇の徳おゝ伝ゝ人あり天照ゝの御遺教
さられたるあけ〳〵〳〵
御位をさゝせふとうふかゝることをゝ伝のまつるとゝつめ
ませるゝ我ほよの国〳〵ことゝおゝ伝いつゝを
唐朝のいすゝ徳智ゝ伝行ハけハ天子の伝位を玄のゝとうふ
ゝ〳〵大走ふあるゝ人ハ構改あるゝ子ハ兵ハ小て諸兵をに
遊〳〵ゝ法伝下の四ゝ人品をゝくゝ〳〵ゝ天下れ

信長卿もそのゝゝ文をもて世をしづめ知ゝてお位上古又同ゝ
摂政ゝゝ下ゝ上をみるゆへやはり上ゝ下ゝ成みるゆへ新たな
下を取て下の人情をよく知りて天子崩御の後位をつぎて君と
なるゝゝハ天下の指のこゝろをよくこゝろへきやうにをもひ合ゝ
下の人情をいつわる也ゝ下に知人出来て天下の指ゝつゝる事を
うゝ又天子ハ天下のそこ位なりゝ国子とゝも人君ゝ又とゝも位をゝゝと
人臣ゝ成ゝ事なれゝ天子ゝて崩しのひとハゝゝゝゝゝゝゝゝ父
君ハ臣ゝなり臣子ハ君ゝなりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ次や死後ゝ文侯
なりゝ天下の政務をもしめ摂政ゝ似ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とにかう侍れハ此おとゝ
又ゝの物ゝ登かの侍者ハ
て威ありかたけれかゝるものさやうる人ハ世人いとゝ
とゝまるさのゝかゝるぬ者しし又世と色このまさる人ハけてしさやあ
いろめ侍てさるれやうこゝ人ハ花の姫御よさ人ゝとゝ
なゝ
なゝの大将の君とそうつたのゝさゝ人ゝふるとこのゝ紀ほん
のやうね
源氏と義帝のうめ大弓當ハてかるゝふ何ゝ兵かゝ のうけてハ

未源氏さゝ(めさ)やゝ(ほ)仁者ハ一旦あやまちあれ孫ハさゝあるゝ
とつゝいとんとそめるゝ出あせる氏十ゝ九ゝの大殿寅ゝと紀ふ
ゝ百ゝ京ゝ侍ゝ仕ゝ物ゝゝハ好色を約いとふて上古の兵風とのこ
せゝ侍せゝ奥をハそそつゝいとふゝとゝんゝと思れゝ約系
ゝるゝとゝハゝもゝとゝ氏大弓義の人の似せかゝゝ出ゝきゝと
仕ゝゝゝて物語の奥ゝとゝゝるゝ上ゝゝむゝの物語出ゝきゝ
をゝとゝみゝて行れの物語ゝ仁伝ゝふゝたゝゝさゝるゝとゝいゝ
九ゝ上ゝ之ゝや薄ゝる雲の上の月とゝゝふゝちひゝやゝる
むゝゝ今ゝおゝ大内ゝゝこゝひの月ゝとゝゝのゝるゝおゝひ

やうとしてみの形ふて四つかるるもれ月花と言葉の餘情も
あり又印外威の上下とへてそ我さるると思ひたるとき
いつるまでもあるへし
人のもろ〳〵世をさとりぬよあひのもし一時に行ひとつのみそ行ふ
つけてらんおりもろ〳〵ひとりさられるものといふはいといと
おかしきつめて
人を疑ふあるもんをんみかはを知ふらるるのもしれるものさる
ものもの如もしなる人に法下るるれんとさるれ大るこにあるもし
はなるよりれをもつるもとそけ一人に多くに人倫の妻を

妻にするれ疑ふはひなる人あり
つるものはこれこの人にたまるへをつるもはにおるるのなるを
はそれこの法にはるもそれ必なるへをしるるとなるを
私の遺服をはておかけるを抑揚をるこをるもるもひ
人に謝りて我をはるもし私をはるるをふへるを改や大臣れ
無人のをきをるを自の術をもるをるもし在大臣大臣をはにて
りあるまに依怙をるるるこれをはにるるをるるへるに
この世の人をも又印をるをふかるるるのもあれに世中をし
なるへおるをはるこるるおいに

大炊大臣のもとに私の遺児さぶらひの人の友信とおぼしきやうなる
人ばかりぞ中文ども我とつゝみ侍りしかばやがてかくれ
ぬるこゝろおぼえ侍りしかばこれを以てこれ弘徽殿の后の宣旨
これは大ちうなるものれた世の人まゝの苦とおぼしてこれ一の御所
と御とのゝあけくれいつ金鈴のふ人ものゝ人ものゝとあ羅ぬさき
御ハらと者ちう一るの御とゝ給ふ金鈴の苦人とをてかゝる羅ぬ
おちいるとを以て金鈴のふ苦人世ふさうゆるるを世ぬるとゝろ
世のおもとゝもしるまるおもゝのかゝ世ぬのれのゝて
車ゝとひのけしの奈りゝる鈴とゝれいぬひやうふゝ人時は夜
や寝ゝゝゝおさあゝる人とハゝくれとも鈴おりゝ大臣めき
て二条右大臣のやゝゝふ別るゝゝる人とハゝくぬを右大臣れ
ぬゝりきよ大とひ当今の外祖又ゝるし大臣おぬを行威かゝの
ゝくゝハゝるゝゝし大臣ハ右大臣ゝ根ふゝ恵ゝる人し相を兄
帝のいふ大大臣と朝家のおりゝとおぼしをきゝゝれ忽用ゝを
ふゝまゝ物ゝくゝるゝし大臣を退けゝて立后のふハ伊
あやまし尼ゝ新て江れの罪あゝゝ
その后の人ゝゝゝはあゝ孫ゝあまゝ兄ゝゝ反上人し大かゝ
のいとおゝゝほとして右ハ右ふ面ゝゝかゝゝゝせのゝ

はじめて文学をなりしよみくちゝ学のるふて弥〳〵ときれハ日さと
かきり〳〵かく〳〵ときれ有り　わのつゝて心ゆ〳〵こゝろふく〳〵あきらし
ゆと知〳〵一人ゝ上ある人の文盲ハなりへ〳〵て源氏と伝ハ存ゆ
博文の人とゝ〳〵〳〵
うやゝ〳〵ゆるおりのまゝ有り〳〵ぬしとかゆ〳〵ゝ云つゝ心ゆるゝ
うはゝ〳〵ゆさゝいさめ
かやゝ〳〵のゆゝつけて古人の人のあゝ思ふ心つゝひ強勝し心ゆ〳〵
おりて〳〵ゆるゆゝもゝさゝ人のなゝいとゆゝ学ゆゝ人のようゝゆると
ひゝゝ流の〳〵ゝゝ行けて彼者ゝ心ゆ〳〵

文王の子武王のわ〳〵ゝゝゝ

中れ宮のすけまいりつやるよのふさひのえてふけうてさと
大臣の益こけうて不徳の時に君あまをかはとしと知事おそ
まさもはめ人なりてのうて天下を捨て孤を成給ふ世といふ
おとゝはおりひのまたこめうを忘おそせぬおとよ
やうをうゝ物をとに忘るゝはかれたられういかおとゝのまれ
やゝはなこうとけうあう
おるやけの御かうゝうやうゝ人なるは春文の侍よこうあせ
ちゝある人なれは
廉白状のまつうて立腹はけうあう当代ようしうてく事

宮の御代いそうまうけるは給ふるこうへ長子は源氏ようこ
けうゝうこうあるはいたれの変けうこうゝあるこ
源氏と廉白状とのう大臣の後立けうあれた弘徽殿のこと
知あうゝをうをいひ出ふ知るこうあう

須磨

世中いとうはゝうゝあるこうまれはせあて之ふあう
けうこうゝられうまうこうこ
退てとうるという情ある者のんかはやうをみこうとやふこうの人
そうあれせうあれけいひうう深うすゝあう人情を

たうこと世こゝあるべきのみにあらずとけ又ものゝ小人たちの後
ちゝはゝ母ゝ罪ゝとそれたのゝまゝあるべきこと他人の上ハ平地
地にゝ夜ゝ中ゝ立て知るべきものし桟をみてよき程ゝ身退
して必害ゝ防ゝあしきゝ所ゝ人の上ゝ立のゝ小人ハ小人と信し
ゝ人ハゝと嘆ゝ世ゝ人ハ行ゝ人ゝ行ゝ人ゝ小人ハ材覺ゝ
罪ゝおちいれんとかゝるゝ所ゝ上ゝ人ゝ明ゝ君ハ一度は
おちいるべし君子ハ人ゝ世ゝ人ゝ世ゝ罪ゝおしいるゝ
和漢共に忠ゝ臣ゝ孝ゝ子ゝ絶ゝ行ゝ世ゝ人ゝ小人のかゝて過失なき
ゝ所ゝ人ゝ世ゝ罪ゝ人ゝ君ゝ臣ゝ

忠天下ゝ改ゝ所ゝ人ハ後世の祖とゝ成て小人悪人猶後の人は
ちゝつけゝゝ世ゝ人ゝ世ゝ人ゝ

いまハ世中けゝゝ人ゝ行ゝ人ゝ小人ハ小人ゝ世ゝ人ゝ

いちゝゝ世ゝ人ゝ小人ゝ世ゝ人ゝ

少ゝ所ゝ世ゝ人ゝ世ゝ人ゝ世ゝ人ゝ世ゝ人ゝ世ゝ人ゝ

沙法ゝ人ゝ世ゝ人ゝ我ゝ人ゝ世ゝ人ゝ世ゝ人ゝ世ゝ人ゝ

あゝ世ゝ人ゝ世ゝ人ゝ世ゝ人ゝ世ゝ人ゝ世ゝ人ゝ世ゝ人ゝ

ゝゝ世ゝ人ゝ世ゝ人ゝ世ゝ人ゝ世ゝ人ゝ世ゝ人ゝ世ゝ人ゝ

ゝゝ世ゝ人ゝ世ゝ人ゝ世ゝ人ゝ世ゝ人ゝ世ゝ人ゝ世ゝ人ゝ

あ〳〵ゑとのちり

にうちのさうこうせ〳〵つれるゝまゝ作んいとまなく

多〳〵ゝ人のよりおほさるゝ所のそまぬとんぶせとのれちん

韓退之作に茂里操云臣衆當誅天王有明程子云道得文王心

出来とむ〳〵より君子の衆をあつして半流せらるゝ実に衆なる

あ〳〵ゝ我と君子自衆なりといへとも学ぶ者多の衆ちさ

ひらけて小人の徒をとゝのふ我衆なりとて多退ハ

徒人の憤いよ〳〵深くして多退むるもあり

ちゑさるゝさて人のみとゝまかるゝひ

尚侍ハ史あ人〳〵任せ〳〵るゝ女御更衣とふかりかりけ時代

只職月扶のるゝもと衆よりしき凡俗にあんん仏徴夏の大石

行るゝようもて退けゝさと紛ゝ乱ゝ衆ゝ利ゝ

さるゝ〳〵の〳〵ゝ〳〵

臺盤ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

をとこ　ハ　うてなほ　つれさえの　ハに
太かく　親　さ中ハ　人の　ゆ　心有　間なき　人ハ　とて　源　ものく
ゝとゝひ源　なけく　ゝ　元　問へ　さ人　まて　笑あ　ハ　世　源　し　世の　事し
あさ　他人　ゝに　家を　ゝ　ゝ　人ハ　かゝ　ゝの　内　節の　ハ　はせん　ハ　なけく　ゝ　ゝに
あく　ゝて　ハ　とゝめ　られ　ゝ　ゝ　ゝ
なけ　ゆ　ゝ　や　ゝ　ゝ　人　ゝ　ゝ　ゝ

なりとゐるものもなきぬ人のこゝろさし古貨主京の陵八今ゐ侍て有
後光厳院後宮能俊卿と下代しの法華堂ゐ石塔ゐ立ふる也
ゐ〜昨日柏或つくり柏ゐるゆしたとも主こゝぬ〜只古のこゝる
くて人のあこゝるまれし後世の結構ゐるハこゝゐ孫あるけどゝ
ゐて能ゐ〜くゐれ本人ゐゐとゝあこゝれて京ゐゐ新ゐるゐしこゝ
代ゐ孝孫の時をゐ紀後世ゐ人ゐとゐゐ中む古人のゐ人の涼ゐこゝ
ゐこゝ御面けこゝゐるこゝ新ゐる
こゝ上ゐ在ゐこゝ孝ゐの人ゐ知ゐゐゐと云ゐそゐゐ新ゐゐ
ゐけ世ゐゐこゝゐ〜ゐ寅の孝ゐ一人ゐる〜〜

世ゐこゝゐて御〜きこゝ〜こゝ
今ゐ風俗ゐ源氏ゐこゝれ大ゐ行きゐゐこゝれこゝ世の風俗ゐこゝ
ゐゐ代ゐゐゐ不義ゐ二ゐゐこゝれこゝ孝は
こゝれゐこゝゐ源氏ゐ色ゐ下流ゐこゝゐ人ゐ
世ゐ〜ゐこゝ〜〜ゐ〜〜
ゐけゐ世ゐこゝれゐこゝて金ゐ人ゐこゝゐ
源氏ゐ人ゐ今ゐ別ゐこゝて死別ゐ〜こゝ世ゐ上ゐ
こゝゐ〜ゐ〜ゐ別ゐ〜ゐ〜ゐ〜

よゝぬ人の言し我うゑゝの源さをし汚さるよりひゝ主傳すきと之
とやうてうゝんといひて人をあゝさもゝ人とゝるしよりゝ人ハ
方ゝやゝぬるゝをいひて人のゝゝとゝんやゝゝゝハ行し
月のいとゝるやゝゝ出るふこゝひ十わゝゝゝとゝ
いゝ禁中の天下ゝれハ政をるゝ志ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ明日を待つけ花のゝゝるゝゝて行方笠者人和
楽てゝゝゝゝしゝこのゝゝに世ゝゝゝゝ近代ハゝを
多き人ゝ行奇笠為ゝゝゝゝ人和ゝたのゝゝゝゝゝ
このゝゝいゝゝさるのゝ胸中ゝ入し笠法ゝる人ハ神をゝゝゝゝを

よゝ笠法ゝ人ゝ行ゝ道ゝる才学ゝゝ人笠ゝ文学ゝゝては
行奇ゝ実ゝゝ笠法ゝて人のゝをゝちひゝゝゝゝゝ人ハ待奇
けゝゝゝゝ源氏ゝゝ人笠ゝとゝゝゝゝの色ゝゝゝゝ人選
恨ゝゝゝゝ
恩場のゝゝ衣ハいゝゝゝにゝゝゝとゝんゝて入ゝひぬゝゝゝゝゝ
をゝゝゝゝゝゝゝゝ
方人君ゝをゝゝれぬ志ゝ強ゝし廟源氏ゝに其恨忠臣
の恨ゝゝて知ゝ君ゝをゝれさゝ上世の英風ゝゝゝゝゝゝ
人ゝいゝゝ人ハ日本を人君ゝ国といひゝとゝ天ゝとゝゝゝゝゝ

清衣をおのゝ菅丞相の行る去年今夜侍清涼秋思の篇獨
斷腸恩賜御衣今在此捧持毎日拝餘香
よつのゝ中にあらうみさまの人のくちもとふるゝハ
ぬれこゝろもちさまゝ
これハ上らしこれにてうしに在位の人ハ民の父母なれハたつのもらき
ハ是ことくてうて知るゝ〳〵幸にかゝる所を侍もひてんふハ天政
の本を知るゝるし文に臣下にとゝまりつゝに公卿の天下に
權を失ひ是ゆ一紀一方のゝ人の上らしりけるきハ利
欲おくそこゝとゝいゝゝ〳〵方高人ゝてゝるゝふ利ゝあちすぬむ

所詮おゝハ清白の人しされそるゝの上にゝ是白をしひゝ
琴をひきすみゝてゝ〳〵ゝに奇〳〵ハせ大師横笛ふゝて
奇〳〵ハせ〳〵ゝハ唱奇ゝゝ〳〵ゝ管絃の附唱奇をすゝハ笛の唱奇
をするゝとしされゝ世ハ横笛吹人ハ巧れハ唱奇ハ生ゝてあゝ
〳〵ゝ公卿の唱奇ハ笛ひちゝゝ高ゝゝ〳〵に吹ゝ〳〵絃ハ
調子にひひゝゝハ面ゝ抱し竹ハ方て調子定ゝ絃ハ竹に
竹てゝ〳〵ひゝゝ竹と竹て方をゝゝふし笛ゝゝ方ゝ
ゝゝ竹ひゝゝ竹と竹てゝゝ吹りのし中に絃
笛一笛吹ゝ〳〵調子ゝ〳〵ゝかゝゝハ絃ゝ方今ゝ和ゝゝゝ

留られい面白きものし
大とのゝ信仕れい今い宰相よりて人々のいとなれいけるの
おれへおりてあゝうゝと世中ひろふあちきゝものゝあるとに
其ゝ打ゝくゝことのきゝへみりてつゝる事ともいうまんと思
ありて俗よまゝてうふ
其比い文武ゝれすて公家武家の名ものゝしゝ有ゝ時人の
義理ゝうゝきゝ人いかゝゝあるゝと大やけきもゝとゝくゝと有ゝ行
らるゝの武勇ゝ人あゝてい主君の用ゝたゝるものし
もすかゝゝまゝちまゝふゝ位りゝうゝ

上代の人々ゝ人ゝきゝ久ゝふて新田ゝ一の日のゝ
ゝれは世ゝのゝ人の上ゝかゝりあゝんゝ大やけのゝもゝゝ本
のゝいふゝきるゝ事ゝ大始あゝてゝや行奇ゝゝりて情と
世ゝゝきみゝひゝゝゝ凡位しゝゆゝゝみゝて当世の利害ゝ感
ゝゝゝゝ

さいひゝゝゝものゝきゝとゝゝていそゝゆゝふ
おゝやけのゝ紀ゝゝゝ和の情とのゝ義とゝゝゝゝけて情文
おゝやけと為ゝ乃ゝ論ゝゝとゝあひてゝゝいゝやけとゝゝ人する紀れい
久ゝゝ儒道ゝゝゝゝ

かくかくけちさ御侍まして思ひたてまつるふ
はけすて文武いやくるとしたとしへとも源氏大将とうけて武勇
つれて多の其けるこそ多是て多へ武の侍用きいうとうくくう
以慶の侍れて多の時ふ乳も馬に敷をたてとれたる弥ちう
はあ侍て女の多ふて男女の文うのこ多くきこれさ馬のまいはくが
はまきそ御ふ多くいうこきるばかさる家くくうちう
やものはいるちよいてきたるみのこふちんくあるたとうる人みて
きしうふへきとうはさうきき人のきこまれい
公家を侍れを意ふさ弥しこのんて始る色はくあ時風俗
を人くうり尺々尺の又正流さ三の人ふれいつけまくうさてい主角の
員貌の不得とあくうる小さ方へくこれも今の時ふいは源氏の
ちやまちいみこへうて

明石

杉川面やまに弥ちしつまて
弘徽殿大后の剛悪のこうより ひるの多しこつとうに大百雷風
はまるこうて久くしこ仏の泉に多ふれいうこより時に出来と
尺くうり兵天の恙食大伝は剛悪の心ちうこ浮世の恙てくこは
杉ろうさまし弥ろ浮世祭ちさるいうこ上代浮世と天下

の人品風俗各おのゝ古いまへての人の心ばせまことにかなはれ
あるゝしとゝへともそのはなはだあるゝにはたゞ上山林さかゝり川流原
うしろ景物の霊さとゝて殺そやうしこゝに又大ちゝさふ
さとゝ者れいなて殺るゆそやゝ浮世ゑての人品あるゝ人
年れに小あゝ積てとゝへゝ仮風俗大ゝ初て改ゝ浮世ゑ
あゝ多くゝ景あるゝ
れゝあるゝゝゝ山を要てやゝけゝなゝゝとゝ者ゝて彼風みさい
ゝれてちんとゝ人のいひてゝんゝとのゝ世ゑていとゝゝしゝ
各をやゝゝまてん

勇は府ゝゝと征とすゝゝ武士の侍し以ゑまていゝゝゝ文武二ゝゝ
ゝゝゝし以ゑ侍女の多ゝゝれゝゝそゝゝゝ

人のみくちも義を信じて国政たすける為ひ
殷の武丁ちよのゆめ〳〵義は皇の心は新しと思ひ給ふに
ゆゑてみな義は聞えまゐらせあり君学せん思ひ給ふ心
大うし世ちよはうるゆとをろ感ぜらるゝよりてみるゆゑあり
つきちさと義をみるはつきちさまを命のわたらめ〳〵苦しみ給て
うち義をいう陽れてみな義心ひめけの義は聖人よりあり変人
は正義のこゝろは正義の正思のこゝ皇通きさら孫曲は
義に通ぜらは正義のあるゆ学まを志源ゑを什義は出て水
瑞義心正義なり聖人ゆゑ人ゆゑはゆるゆゑ武丁は傳説を義

尺のふは正義なり是武丁のかゆて大臣伝士の仲宏せさ人今ゆを
さうして天帝の義ゑえをゆゆよりなひとふ伝は功利の霸術
まて大乱は形れさるし武丁至徳のこゝろて賢を忘のふ史
ゆ学を亟て義をつうこれ〳〵正義は体の陽義なり〳〵孔子は
両極のゆに和〳〵とえをふは浮世至極文宣王の号をとけのふ
〳〵さ人ゆゆ源氏の又帝をこうふは正義なりをは心正義を
尺る者いう妻和〳〵子三人あり〳〵奥のゆゆゆとは
和〳〵次のゆは又和〳〵いう取更の義にゆの妻和てこは命と
うちと付〳〵森のゆとをれは奥のゆをさ〳〵

樓より火もえ行るをいそき樓をあけ出て城しゝ行とゝ
見れば焼死しまこと妻子をも失ひ和歌して世を捨る人なり
しかゝる死して亦亡のなせるゆえ此和歌の理しきれば
火は猫のくひ残る火のつきて衣樓の上よりてすれしゝ
樓よりつゝてもえ出るゆゑ
いまゝのおもゝ一つまてのきゝあかしけるつきなる
すれむ一おもひをさせて
人はふるさを面白きゆゑ
おしゆて一かゝる人をもひやるへ一その後いかなる人
の氏をふれたちれ所をんに一人改行を助あるゆゑ一源氏は
おもひけの法ゝゝ改行あつゝ弱くさ人とおゝ一をきて
これはかゝゝの所をも人をもふれ見ゆる法学なるへ一
おやゝものゝゝとあつふを学ぶ所けるさゆかゝゝ
人情体よ我ゝ我れさ孔子をとてゝゝきす人のいさあひよ
もゝひゝさし賢女の所ゝゝ
これ女のゝつゝさゆゝて云とゝかんとゝもゝきゝゝてゝおゝ一れ
学問命ゝゝ多ゝゝひゝゝやゝゝゝゝけゝ発表の学をつゝ
ゝゝゝよゝきゝのしゝゝ見記学 只物子 学捨ハ系ゝひゝゝゝゝ

ひゝ[illegible]とゝ[illegible]ぬゝ[illegible]にゝ[illegible]れゝ[illegible]ゝの[illegible]ぬし[illegible]れ
箏ハ女に上ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

男子の供者くに君臣のちにおぼえたるひろぬ猶をなあく
すれいんよりたるすとゝくそう
君心すきのさほやとさせて
明石上のそうそ所乃部つゆふ源氏ゆけておそ〳〵さて
叶ふさるしそのやうきをそて人乃いさるひ乃うるこ〳〵
やをいつ所ろう
今ハ世遠を国城と云う人乃濱の家とゆふわう十七八下乃
と源氏自人の乃参とゆふ所乃いつ石津一の風京ろう
淡路守山のさきう源氏の舟山所源よすかう

二条君ゆ色のつてもうそうさるんこゝは
平生ハ行ゆ君ゆ紫殿たうるとて我を大切とゝ
妻ゆるとハおもひ出ろ者しかうそんのすきひと一旦真ある
やう出そ出ハ人乃別ろれハそれようけ〳〵ル一人乃ゆきし
かゝいゝ和おもいゝさよふこそゆそれ
女子ハ父母の家よ世てうてありしたるしまきゆのそつき十人
一人しとゝりて大ゝ心ゝ乃ゝ為ゝ者しおかゝ所ゝはたひて
さほゝんろゝきるおゝ世中ハかゝるものそとそれ悲ヴ
ろゝ〳〵かよりて思てふ〳〵ろゝかるぬさゆよ

明石上の人さゑ奇特しすこしのこと人とゝみてゝたちまち
まうハゝそうそうゝ我身の祝をおもしーてまて源氏ゝ時代
久あるこハ喪なり
二条院見ふ初ていれよりくさも
紫上心りちゆ奇特なり更の[久敬]たゝ当ちにくかゝさまの見
やゝゝ無のうゝ海給ゝまゝ
ゆ見次の記ゝ追ゝしゝ海つゝ
つゆふ伝の御いゝめをもゝ
きひゝゝなゝ伝花源く我ふあゝせ人ゝもおゝゆけゝに私の

恨をもゝひすゆゝなゝさんゝとくゝうゝ学力才知ゝに
かゝのゝさゝの人ハ又ゝゝくひかゝるゝ一流論と人のゝ
ふふこゝうし好色の人ふて用ゝ立ゝまゝゝれゝゝ
世の風伝なれハその世ハ人ハ府ゝハ一又府ゝ立ゝ恵名も
多ゝ人一今ハ英男ゝ立ゝ人ハ一向ゝ好色ハ名ゝ
ゝしゝりハふよゝ行ゝあやゝゝの方ゝ
ゝめハ何ゝゝつゝその比ハ海ゝ方ゝ比人ゝ世ゝ恵
ゝけゝゝゝゝまれゝ初ゝ世ゝ比ゝのゝゝゝ男
かゝハ行ゝゝけゝゝめハ明石ゝ恵ハ行ゝ一ゝ上ゝ

[illegible]
のおのとゝあつまりて宮たちいとゝかなしと思のよしを
定出して京のそうもうすくこと上云年の秋たのもれやう〳〵
五に出つゝくるれるふ所石六さんれのよりとれ人〳〵とあるすると
やゝまりてのられいるけるに一人原一かあるくゝ元つゝみる涙をふく
所石上出られなるゝ〳〵色めきるる所るとくゝ又なきけ
ものるるに所石上六ケ
入乃の文の法よの仏
世子の筆城よりいたるゝ声あやまりて急れいつゝ去るし

[illegible]
ひるふいまゝゝとゝるゝ〳〵ことゝゝ信ゝ死人なれけるゝ
ゝるゝそひゝたゝくんかゝるゝ〳〵
これあゝまて知ゝまゝ一人行〳〵ぬゝき言て
所石上氏加人のゝもゝとゝるゝ〳〵おんれゝるゝ人〳〵ゝ所ゝせれ
さいまて出やゝきのゝるに二ゝとせゝれ原氏ゝつゝまゝせゝ所ゝ
のきゝて原氏ゝ文ゝ所ゝまゝて滅ゝ〳〵ゝまゝきゝ原ゝ
かゝ所ゝしゝゝゝゝもゝとゝゝゝゝ又ゝゝのゝにゝし〳〵ゝ女
院より上るゝれゝゝの世ゝゝゝるゝ〳〵ゝ河ゝ遊ゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

羅に沈みて帝ののぞみひとしく病気なるを上知ふこと
改をなすべきを人のこゝろ〳〵持ばとゝんとりは我をもむくぬ人も
おろし苦しめしく〳〵ものをんなんはよろ〳〵
こゝろまをせこゝろせいをとゝふるは後鳥羽院
て消しこゝろ〳〵みへさきのゆく蓬上の天皇院
知りし人も源氏をもむくぬ人なれは一院とよもしきるあり
けひさ
数世の天皇摂政のすゑ引きし京あるさるは我人をゆく世の
こゝろ〳〵きを竜舟とゝいへ直をて君臣の道をあゝはるをも

こゝをかるを病とゝいるるいことをもあり
二条院
是人時をよく知るゝ凡人は我分をまもれは氏筋ゆく人のゆ
れをいをは我をこゝろ〳〵にをゝうんをゝはをとをゝ
ををひををて首はを後鳥羽院ひををれはけををゝひてるを屈勝
をををもの源氏はをををるれはんおをしのをを人を怒をを
をるかゝはけれををもみゝをををゝをゝ人中ををるひやをを
たのをのをゝるはを奇特ををり特し古今はやをを者のをゝのたた
をゝはをれをり

本文脱スルカ

思ふてあるべき報をいつまでも行はんあり人をいたづらに殺されかハ息とゐてそれなる内ハ人のかたと責こゝあり又ハ徒とゐて徒る報ひ過とゐて知る報をもつて源氏を亡ぼの大臣る事よりとゐてしるこのふハ真し後白川院の小松の内府ゐて

と思ふて報をされ　とのゐ　申　のんそし又入道と義

例せられハ左理の毛極られハ兵部と外はし

てを時のよりとゐるもあれて源氏のみとゐるしれ

大臣つらあるゐ思ひとゐとゐ

兵部のみこ　紫上の又あり

源廣源氏ゐひの時兵部のきこゑとゐ

ゐて音つれのさしゐ徴及大臣かゐたかゐてゐ人ゐ

音信せゐは自他のゐ行きるゐれもしこゑ人ゐ

人情のゐすゐ又ゐれハゐ兵部ゐとゐひ行て源氏のゐる文

のゐるゐかるゐまにゐかりのふハきこゑるしゐ

ゐれハ源氏のゐゐさゐ行ゐきるゐ

兵部ゐの文ハゐゐきこゑれて又ゐとおこて文ゐと

ゐゐゐあきし源廣のゐゐひをゐもゐ花のゐゐハ紫上

ハとゐれもハ徒毋の世ゐ出ゐるゐゐきし

世を弱冠にとりて行ふ色のうつり詩ふてはん
いやしき花をれ花を女心人とらひ辨とらひい中きめし弱冠の
めくるうへ〜偽偽問〜めし洛中をくるはかくのうき
者妻をもつへき時ゐ〜倫をれんとすると防色ゐ〜色
うめ〜とんくうう清六条〜かうとつけ藝能をおして
冨貴の人妻おうう者のもてはひとゐうつる人うとまれ
或人をきゐひきゐ〜恵〜起るのゐ〜うとゐれ〜
おやのうけとまうたる
今〜心おとう〜うゐ家を安今を張よもて変ゐゐつ者度又ゐ多

の物によりてゐきてかるうゐあ人ゐれを大〜〜御宅をうて
行末のよき者ゐ小をおとう〜〜ゐ〜ゐ祝の色変ゐりて世ひるをな
とか〜一生おうるゐ〜ゐて一旦價をうよれやうゐれよりやて
ゐ世ゐうて清悔ゐうのし末つゐ者んてゐちかうゐ更〜
幸をも比ゐ〜う
のをうけうつをうう
東つゐのおをのゐ切いをんをゐ世にあるみを〜の人のゐをとうう
ゐう〜ゐ〜ゐ人ゐ文れゐをの品は人の世中のゆかるゐあハ
中〜信をゐ多をおけうんと上ゐ〜しをゐのをとぬをんををうう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

源氏翼とあさうして功をあらはすべしの人なり
あいらうして法は鳥羽院の御代に大うち右衛門督なりしを
ゆめ〳〵世人かりそめのことなりとおもひてゆるすべからず
かりてき人と世に伝へたるものなり凡情はかぎりなきものにて
ふかくぬやうにたゞひとへに奇特なる又我によき者をすゝめて伝授
とまれかゝれし公儀の伝授は公義のなさに功をなすべきなれば我ばかり
あるべきようなし

繪合

后妃御方にはこれを絵をぬるまぜのふるまひなるべし天子には
いかゝやうにふるまひ王威をかゝやかして武家の天下とあらはさるべき
清盛卿の専横の断なりしかば一朝一夕の沙汰にあらず平氏の亡び
さうし牧羽の末代に絶えさせ氏の子孫中比より威のおとろへ
たるに凡庶にふるまひ兄弟の勝負徳論をみなへ君臣乱れ
て威大臣にうばれ末代にいたりて君臣威をかゝやかして我威
るゝありて自中なるべきんるとふみ法度をかけつゝにたゝ
すきてはなるべきと知のたるべきやうにたゝ
の凡情なり
一才かゝるいつゝ

才学のうとくなる面白し人学ひされは道をそなへし才ハ天学くし学問の
人ハ学ひてもう益をとり徒を結ひ行う人ハ天下国家の用をなし
ものしなれは才ありて才学なくれはそこの業いやしく才学はかり
行うをそふるう大学也才学を兼る人ハ新に道をもつて学ひ行る
ものまれなり学問貴賤貧富の分ハ長かるさる人なし
天人さいのかりくの
学才行る人ハ文文才ともすれさる者ハ学才兼るハまれし
学才ハ人時世変に道をう才し国天下を治る事一なれハ学才と
ひとつ〳〵文才のけいハ一体し

相風

ふふかりのおもえのうちとして
あつてその身の位をとるもの先祖の富貴なるもしくして
分をそなふはなるものしも分ハつくるうんいやしく極いすき
まちの人ふとそうたてたんしなるハ人情也石上足よかるべし
おくりたふて
入たる二変故の地に入さるすハこれあり左の史如なるれて
故の位ハ中〳〵さる事のをそうみハ形くのの行ふさもあ
へし昭石上の下らるるハ什さるるハ公家なるうそれとなあ世ハ

[illegible]文の[illegible]に[illegible]文王の后妃も母[illegible]
め給ひて八年[illegible]国民へ[illegible]又母を[illegible]寧[illegible]久[illegible]今[illegible]
者[illegible]かき[illegible]
[illegible]

后妃

[illegible]
[illegible]の人[illegible]
文王の后妃あまたの女[illegible]
[illegible]

宮女皆[illegible]母のごとく[illegible]
已[illegible]女[illegible]
[illegible]
[illegible]
女[illegible]
[illegible]
[illegible]

の代とされて威勢をふるうこと世にむつましくいひつたへすべきものなり
されば世人は若年をとりけらすきさるべし貴賤の人とうとう
たるあるべきなれども男女ともいとけなき人々なり
麻衣きしい
除服の時被りし麻衣をときはなつとそれやうるに用ひすく
なくて白き除服あることもし古人のいつき時よりおこせり事也
世のうすきまゝひるる人喪のる二年を久しくとして除服と
まちあるにぬきすまるとなる強りなくとふ者人のもちりけ毎度
貴賤の人るにそれ弟すにんとすまゝ云つふ者もひぬれば

いよ〳〵古風ふるまつる人〳〵
紙〳〵まつけて人のまたにおいてもめる者ハ文武とまた藝能まんと
かけて文盲迄知りて成人する者多〳〵いやしき家に生れたる者
ハ藝能もモ才知かしこき者也ハ我身の徳とはかり〳〵とひ
よきるまと生て人と〳〵ぬ〳〵とうるし侍ハ筋よき人の子ハ
才なれハるまあつまるまと侍ハ筋におとりもし才ハ有る者多あり
まつ物者ハ藝能をれた利欲のみよりもモ〳〵る者多れハ人ようし
も家風乃るまとしかるまるし生まる侍の家の子をて
さたおいとも成すせんとのまあり

はかりてこれを人に
世ゝ八代にいたるまで武家
のなれの器量ばかりのおのゝ後孫
なりとぞ家のよれ親のこゝろをもてつゝしみかく
いうべきとぞ世ゝ文武兼備の
人あるとかたゝめらるゝもつゝしみまもるべきなり
なをしてなほ学問をすゝめ文武を兼ねるこゝろざしあり
べしとぞ　それあれ　ふるひ
ぬ八寮試にけさせんとてまづ学生試
学寮にて試と寮試と云　試史記とよむ　もとよりこゝろ

人を撰文章生を補す撰進士とは凡儒業にもとる人の次第
なるとかつは先補大学生を初嬢補を経て九年の内学問
つゝしみをもて切とつとめ学大学寮にて試らる史記とよむ
て新式とは五経の中に三経に通ずると及第とは凡文章博
業生に補すさて擬擬進士七年とは七年を経れ
八用ゆるなり七年の内学問して手習或は有て課試
をとゝ七年試を行る次に紫の文をかゝむとれる秀才
進士の二科は内の秀才とは方略と云方略は経綸の大なるとは
こゝろし就中問答をかゝるをいふ大なるし進士とは

対策とて古にはこれなく今世は文章得業生二人あり秀才の
あるにてはなり給料を給て学問をなすべし其方略の宣旨をこと
されて式部省にて課試をなすし又入学の式は学問に益なきは性
質を案ずれと大学寮にて試て又史記漢書及穿の人
と擬文章生に補す古人は式部省にて行わるべく試
試ばしむ及穿人と文章生に補すと進士といふ式部省
少て和歌をもれて試らるる方文章生に補して法さしに
方略の宣旨と共にて課試ととくるも有進士は対策なり
とも方略は宣旨と共ふれば方略の試し文章生の方は試
くるはるる献策をするは唐風の時と又分国の樹るるるは
教化のためとてなるし帝皇に行て後は献策せるるるし
或は文章生にして対策を持て課試は例あり或は文章
生ふとまりて方略は試に及ばるるもあり原氏久定の君は
今この例し東雅院の対策の時の御前試に行とをとて
及方略にて進士なるべて行法の事に行べし
百代の学校の形は漢唐の制おとるべし文とのあるも
一切の凡しなれるに日なるして集るる元明られ奇特なり
はせつり上古学校の改はるべしたはやまるして君主

凡ハ行ことと百代ハ大学ハ学すして礼楽ハ馬を教の六芸と為るとも
ろくとう
師説に曰ること有りて
源氏の系図を作るハ所あるて源よりけらるる人皆古凡る
所歌世ハ代ハ世代を為るハ世代を生ずるとハ代ハ世代
さるハ所あるハ有るハ人をひなき徒の出家ハ有るなし
むしろ歌人大学の
只今源氏の古歌ものを作るの人皆ハ志ある人今世と伝
世代をすれる人上るハ人有りとんとうい学ぶ者ハ有るたとひ上
ハ有る人文学を廃ハ有ることを学ぶて源達ハ有るすてハ有るし
ハ有る古ハすれる者ハ出るやうに文武を学ぶ者ハ
ハ有るハ有るかとありてあるるるるめ病みられず面の
ハ有るめに男ハすてとハ有れハ歌あるかとるる人ハ又歌ことし
ハ有る人の徒ハ学問の学のみ学るハ学るかるハ
して系ハ有るされハ徒ハ有るきし徒にハ学ぶ堂上ハ人ハ
唱ハ学ハ有ハ叶てすして系ハ有ること徒ハ引よきや学の徒ハ笛ハ
ハ有るの用ハ有るハ有るたるハ有るやに人ハ面白しこれと唱ハ学
の徒とハ有ひるるや用ハ有るハ有るハ有るハ有るハ有るハ有

[illegible]人は大石内蔵助に対面をきらはれ
ハ長屋にあらはれて後ろ[illegible]なれ共面会は
あられず言葉にけいさつ一向いやーさし
人を養子迎るとする人力の[illegible]子を天命にて[illegible]
命ぜる人をあけ養子人を命ずる人と迎けさハ人力と云ふ孤養
ある人ハ一旦ハ[illegible]ハ孫[illegible]ようなるもし威勢にすがりて一旦の
[illegible]
世ろに法人ひろみ法ひろみとて[illegible]人ハひろみ五年腹
[illegible]大石盛世の時乃[illegible]の[illegible]の伝ふる

まひの人ハ必ずハ大石とおもひ[illegible]乃[illegible]の伝ふハ我あ
[illegible]世主国民に[illegible]天命にて威ある法人
のたひ人ちふ[illegible]と[illegible]ハ腹を[illegible]男女ハ世の[illegible]
[illegible]

王髪

あ[illegible]て人ハ利益にて[illegible]人[illegible]
世おんひんの[illegible]ハ乃[illegible]女法し地ろ[illegible]
[illegible]ハ男子ちも一ふ[illegible]
[illegible]

そもそもあり人は遠原吉道の女房なり〜今は新そもそもひと
て凡俗なれども人をかくるべきよう是夫は人がくるべよう
人をかくるるふうれは女房のかくかくして夫はそもやまさきを
世嫁てぬるものかにいるまれて一命のそもそもおとしかく
夫人をもちて女人の妻を一とするべう

初音

さてもうちとけて
人主自殺を感ずて仕をまれは家風ゆえたもくるるものし
和ずして俗法みちうかくありて和をそけすうりてまふ

もふるものし。御ゑ此時天府千金才伝をかむ〜べきはるし
其世にまむ人はまもおのれ〜〜〜〜そ人こなるもむ〜べき天のみを
むるべきはるの事。深きたんうて又ん〜〜いよ〜〜ては
物の物物をもつてるはるきあしんるるらてハ久〜〜たり
さるものし。家出はるるたふとのふ〜〜ハかるべ〜〜ん所ありて往
るべ〜〜をすとたの往傳るるハ乳つりて出生をけく
とて相ふるた天地のえまをと出生をハぬめり人の家出を
〜〜〜〜ん色てたをとのふ〜〜ちるハるちんるより主のあき
ふるべ〜〜ものし。今案水むすやとは男跡奇はいて〜〜る

るし粥方の人と答ゑそうにつきて酒或湯つきもとと事と
ものもやとふる球をきてそうろうふそうしみ仮もやとそう
むすやたいかひきつくろひてあるけや時奇の人はなとめる
と釋ゆにうとくを釋よあるもそうし人のの馬もかふなもや
とふ又人ハ飯と食してるはそうくハいし釋とうもや
いふうとゐ者とかうを水むもやといし答脇と飯もや
答つけうり厨牧令乃水釋といふそのふそハるきし

崖

世と今貞女とふてんけりうしてかうるふ事これハ貞女

ハいかにて又此孜あうとみもうハおかるるやそうるるてなの
けはしもうて形孜けうてんけをたとはうとはそれ体の兵女し
あうてんの仮とうるうもの世ハたちふうとと我ものうるうこうるけや
まもうこうふそれかこうふハけうをを我んの仮をそれ我ものるふハ
けうさうるうもうハ者に仮うはうるうるやるれしもうるふあうを
を候ものるおうを辞というう口月を記るうハたかうをはふてと
というう口を記とけうるけうるけぬやうにいしうてむかううと身もうし
但口を記人今を記うは天下共大時とそうるうるうう神代上ハ日なのをと
ものうるれる面板口交さ面うの形秘多うう女の入うう今た

まはりをさえて人時は夏のこまやかるるは女の人のちかるるは
久しくてあるまじき花に日を花とと仕物は及さ示はるべし五て
仕物は女はきはよかさらのし笠本ては三更五段の月しまさと
明るさとあるさもてあいさるるめらてその仕清か物云ると
いひ仕方を獣りて慰しは生をとは口はまくしはのまる
されい女とちの物はもとのつて古後とつひるる女ーるに
こもしこさるのもしそはをきふーもて三更五段は逆せんると
戒るさとして又人時る夏とえてさんしはあれはきはんん
みに仕物とはいて女の上はる夏とつしんもちあをきまく

きるるし一説の怒を言る女といまもるはは女の人事一のまりは
嫉妬ふはるをはよりて仕物更は必色ふるるものて女のさる
場はるるのをもとるるるされは原氏の仕方るるも切道仕はは
鬼はるるるもは佛をとるるるるは芸とはにいるるられ上天子
よりも在る以前は一婦とのふるるるるをとまるるて
ふんをはる

常夏

男女とも子のなは家風根をし家風は主の徳とをとてきを人
のはつるふみを五に人てを分りるをのるけはは

尊氏

善悪のてゝあてはしらぬ事なれども高ぶる心
多くは後悔するのし但我身の悪と云ふ事は常々速
なるべきことと人と同様なるべきぶん考へきるべし

野今

世のけうさ海よ
春のおもゝてゝ花とみてハ秋もみすき枯はいと又たゝ今ハ雪氏
ゝひとてゝ多り花世人のけうさゝとゝ似ることゝ

行幸

氏姓を問てゝ初は王者の設るゝ所なる氏姓と改てゝ
ゝゝゝ出ゝ大ゝとゝ人のゝすゝるゝ中ゝふて漢の世にの
ゝゝ盛ゝ日本ゝ原氏のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
武家の代ゝ桓武ハ平氏ゝ原ゝ教教の原氏のゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ後世盛ゝゝゝゝゝゝゝゝ
相国ゝ原氏ゝ近ゝ上古氏王凡のゝて強ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
内大臣の氏姓とのゝ一変ひゝゝゝゝゝゝ性と
性のこゝゝ氏姓ゝ氏姓とゝゝゝゝゝゝ

出て法師をさそひ人のひとりもあれとこゝろをくるとて
かさゝ郡とゝろあり内府の子おハたとの殺ありつれたよゝ
ゝひとしのハるゝかゝる孔儀をまゝもてゆくさきるし夕方
孔のむこゝろ孔といひさかりて子も庶とつけ母ゝのゝみ孔
わひゝるハ大ゝ失ゝ婦ゝ孔恵のいとけなゝ
ゝゝとゝるゝ人の
光ゝゝゝゝゝ人とゝゝて源氏のゝるしかゝゝとゝふゝゝ内大臣
のゝるしゝとけるゝゝ大ゝゝゝの光ゝゝゝ源氏とゝたゝひるゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝれゝひゝゝゝゝゝゝゝ宮殿の大臣ゝゝゝゝゝゝひゝゝゝ人ゝゝゝゝ

かゝいやゝゝかゝゝゝゝゝゝゝゝ

る生年歟とかくたくひにけり

吉水柱

いくそくの乃むしのかく
けいかさねてそくるへくもそれみて人の為之比あるきめし自然
いあるとも多くふくるとれくるし むくるのるハ源氏のんのまし
あ〻あるまし王女院のるハ北の方業上もそ〻ぴ源氏心
五位しひて源氏のんそハなそそハとひのふすきあり
さいくとひやり
崇岳於々ふおひやりふつきれよりふのかりて源氏の跡者よ

あるるのとう〻〻ふとあり〻日比我々ととそて行ふあ
欲せるのくひと我々とすてゝれくの余後るき情とそて
恨ともんすいとひやりふくそハうくそ記るるるくー

梅枝

信あくく
所信の人ハ多りちふるひかるし〻重さるひ人々をそされハ
自然とよるぬ行信ともすーるのし子信の人ハさあ〻のふるまし
さひるくしあるまれさるのをそ
つあふくるくさくちと

人の名ゆゑなきをつくることし人のみるまさるはゆゑ
ゆゑなくしてつくることゆゑ面白き形ゆゑひろくしるはゆゑ
ふかくしるゆゑなり

藤袁葉

何ごとをもふかくもて
以陰ハ陽ハ陽ハ陰ハ陰ハ陽ハ陰ハ陽ハ陰ハ陽

小人は考えなしにおもしろがるものなれば上ろう人ようの
ものなれば一ぞくおもしあるに今のし源氏は内行脇目振
のみのようにはせていかくちうもいかくちうもいかくちうもい

日本ハ天地開闢の武尊ハ上代貴賤のけぢめかゝりてハ和歌
むすびしたしき和哥の道とうるせ人も末代之人情にて奢侈
風俗やゝうるゝ武尊ハ武尊ハ人倫ハ道を
男女おたがひにまことをもつて人倫を
道と以てなけきをやつけ人倫をもつて道を法む
世ハうつりて人情ハ
るものはやうゝ和の用ハ
名こゝ丹て禁法ハ
ハゝしゝ乱世ハ人情かうれいひらけ罪ハ

ゝゝ今ハ一向ハ男女の別を行ふ
若ハ和哥の乱るゝ
主てのるゝ
ゝゝ
或問ゝ男女の法
日本ハ乱るゝ
いゝ法ハ男女の別
変ゝ和の
情とゝ
ゝ古今と二ゝ人倫
ゝ人
ゝ上古ハ
ゝ法
ゝ武

より礼楽制度ととのひて法令をもむけ給ふ
のるしるしは男女共情欲を男子は志をもて自
然にいましめてこれを心とやはらげ人のおちつく
ところ者は夫婦の為ふ妻を同じくする学校也
改めて男女ともに性のつとめいとまなくみちびき
ゆくゆく婚姻をもとふとのゆるしをもて他の代也
るも徒なる戸をもけとれむこれをよはあるもわた
あてし上方は婚の礼をなすこと情欲にて
人の心邪偽ふるまて男女のんくまれ初るゆえ婚を定
後は婚礼文偽出来て巧言をひらくたなうめれは法も婚ことは
よりて是非あり堪忍それは夫婦和合家おさまれ孫子家を
繁く公役をつとめわれ上方は大男小男富貴をいとはず男女
の徒のたがひをなせ礼婚は大男をとるべく妻は下ようとも
なるべふはけまうに男女つくやうのようとあるべ貴
賤の家はさも男女をしてそれ人ゆえ一命はいとはし
いやしきようあるべき者とわるひやうにけんとをしかしてて
はてく人をつふるはいさるものとうれ上らはれこてあり
あるる者はおこるのゆえ夫婦は大男小男をいとはていまの

やうに人々はなはせきあしたかとうんさんさとうに花
は孔子の時代のうつり有れ
うのすまいむしてこそ人のすまうもとかれ
すまいくうて石ハの谷ひとうを越て海をれハ地せまく要害よき
所なるの人むりハ関所をかたされいむりハ人をけうくしたがれ天
下平らしのちハさて用心いりてすむ人をれをるくし兵庫四
なとより里ををれ百姓の家ハ所々ちいさくてさしきれに合と
はるう山谷の家ハ無尽はすまーさ地し
よろいのことさうあくすを

大小共親の世に出ハ若ハ子の代ハ大うくあくをる者し世の
中は婦ハ妨をるこくゆをあくて又身の上をうるれとけと
はるる者ハのすにおそ海のちある者ハをおくくをるす
ぶすさんをるう大うハ人のいひるー世のあきるひまあり
てあうをやうるをれし所に眾るくて叶とうひる人は
世のいとまを一人るくーー君子をれハうをてんぶて身をうをき
雖もけうに天命とをる更ニ小人の徒とうをむすれるの
叶代よりそのの学問をはすれをれつきの人心凡夫を
ぶりしまあむ

中ゝも雅房のあけくれよ
ばかくゝ
去実の配所もあゝなつかしきうへに紫上の露とけ
あゝ苦うまさるまさるとも
とゝ夫婦のあるとたつかさるとも唐ゝゝ夫婦ハつきなくし
ゝとゝくゝゝ日ゝ
ゝ人情ゝ源氏のゝ
信濃田のゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝ配所の
おもゝ立ハのゝ
おゝゝ
ゝゝゝゝ
元実に病ゝ
ゝとゝ
師母ゝの
ゝ現の師
れゝ源氏
ゝゝ

おもゝ立ハのゝ
おゝゝ
ゝゝゝゝ
元実に病ゝ
ゝとゝ
師母ゝの
ゝ現の師
れゝ源氏
ゝゝ

まさくいとあるを（ちよの内をもふくうちあつまりて忽に君の命をもう
きたるるかのくるをもかれのふるまひ
をもの世のもひひをもかるれはをも
造化のをもはなかのまりてまりて自然と人の一生の福禍
定るをもしをもに歌を組のもしるを善悪の行の造化の理を感し
をもの子孫を恵をるをもをもよりを理の功勇しをもれをもを人の
今を行をもれたをもの凶禍の命をもをもて妖怪をかをもをるをふて
ひをもをもして吉福をるをもしたをもをもひ福をもをくをけをもを男女の
をもて必凶をもいをるをもしを子をもをもとをも人をもを福をもを取をれをいひ

もをゆけい身のおをもをもと自分のをもをもを奇特をもを先祖の善悪を
感恵造化の定をもて福禍の大をもをもひをもをもをれをもを大をもを人を
人のをもと行をもをもをもをくをもをもをもをるをもを源氏の身のゆをもをいひ
をもをもをかをもをに為をもを衆のおをもをを人をもをいふやをもをるを
いをもをもをもをるをもれをもあやをもをまをもをもをもをのをふをもをのをもをの
んいを乱をもをもをもをを人をもをを月をの御前をもをもをいふをもをもをもをを
をもをはをもをもをもをこをもをもをもを祈をもをいひをもをけをもを自然を命をもをを
をもをもをもをを信をもをれをもをを流罪をもをもをもをもをれをを大をもを難
のをもをを信をもをもをもをもをもをもをもをもをもをもを世をもをもをもを出家をもを

さへとしたりの近世和漢ともに出世のまことをやめて引こそう
所をとゝのへさかるものとなると雖とゝ俗を冒とゝるおし
身を捨て義を重るたのゝ深るあはすて仕合とゝ雖し人は世の穀潰
をんなうけ法身の実義をおもひて法世の名をとゝ考こそるし
つみふかき身のこゝろそ
伊勢太神宮は仏法をいとゝ嫌たまひ給ていむる仏を中子
とし立すみとゝいひ孫はそめみ寺はかそふ塔はあゝき堂は
こゝろさ信はゝみあり比丘尼はめゝみあり神はゝかゝとゝいて
いもをそなの名をいさめるるれあるむひて孫をのこそ
あゝ

今仏はとゝふるいそれるるたかゝ上るゝ大和姫の世記を仏法
のいさを絶と有西南の法を人の国ゝすめとるの儒ちれいやて世
に仏はすゝられて王乃衰んるとゝ人はよゝいさひし聚
仏法成信あゝ舟文の地を五ゝ通ゝ法世と称ふるのあ
あるゝいるゝいせとかゝまゝ神文おゝまさてかゝるゝるし
ゝもつゝゝあて造作あるたに絶ゝとゝ考ゝ者ゝゝ
かゝぬ風にたゝるゝいゝて俗ゝ示の古凡ゝてれゝさ
るし大和姫閉伏ゝかゝらゝゝのひゝ三室山を孫て伊勢
の山田の地ゝゝゝゝ山ゝおゝるゝるゝそゝゝるゝ

明石

帝王のふつゝ宮にやゝ[illegible]れのひてゝ天地ひらけしより[illegible]
母后の源氏の母文武とかゝ[illegible]ゝ[illegible]ハ
以人臣文の門代のほうしゝ[illegible]ゝ定ゝ[illegible]れハ春文の世代とゝ[illegible]
不忠の逆心あゝ[illegible]ゝ[illegible]内侍のかゝのゝとつゝ[illegible]て皮
職を割りのゝ逆心の罪ハ源氏ハかゝるゝ[illegible]文化後言と
天地ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ源氏ハ帝王の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
せのゝ[illegible]ゝ土方知ゝ[illegible]れて世の改[illegible]あつゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
と歌ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

人花あゝ人心ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
好色のゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
好色あゝ不仁の者の好色ハ中ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
のゝ仁花方知の人ハ凡質霊ゝ霊ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
この[illegible]ゝ教学ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ以人ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
山ゝ[illegible]ゝ山林とめゝ[illegible]ゝ樹下岩窟とゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

又ゝ法師の名とするとゝくさゝ
今俗よりそなへつくることゝいやしきものゝ行ふ所なり
面々ちがひ正樂其等琵琶の音ハ田夫野人ハ拍子おのゝよ
ばひて面々ちがひ其さまゝ人文ハ学問して
古風とそふ人なりてハ新樂をハ好まるゝ人なり我朝を是下
しも男女山伏なれハ歌のひとゝとなりとゝふ古哀なるもの又ひら
耳ゝてまゝぬやんとゝうゝ笛人ハまゝせゝきとゝ延喜の前代後代
あ会ゝれなる琵琶の古上手あり云ゝと人なの又大臣直ゝつ
かりなて上手なり人なる又ゝ又ゝうゝ我ゝも延喜帝れ

いうゝとゝされ一面接音ゝとのひとの音とゝふものゝは人なゝ及ゝし
ゝれハゝゝるものとて人ゝあゝつゝるゝゝゝるゝ世ゝ人なゝ
しゝら自然ゝゝとの音とひゝとゝうゝ記ゝゝるゝゝゝゝゝ前大王
の時ゝる通ゝてゝゝ似ゝてゝゝゝゝゝれゝ行ゝてゝゝ
たゝゝとゝし玉道琴源氏ゝのゝの音ゝは琴ゝとゝゝし
ゝゝれゝゝゝゝゝ

源氏物語抄五卷然澤氏不化也曾聞全部五十四卷各抄出之
○中院前内相通茂潤色之旦擇切於時可為五冊也全
部抄者今出納大藏函藏之乃各冊
内相自以朱批校之云云以執筆之本殺寫畢
享保庚子夷則初九　　堯臣
右源氏外傳得諸丹波国篠山松崎神童之所
延享元年申子夏五月廿七日　湯元禎
寛政六甲寅中秋月校　今井美政写
文政五壬午閏正月念五日　田元興写